

第一編 地誌

第一章 桜島町の概観

第一節 位置・面積

位置

桜島町は鹿児島市の東方約四^{キロメートル}の鹿児島湾上にある桜島の北西部に位置する。桜島は、大正三年一月の大噴火までは島であったが、噴火によつて東部瀬戸海峡が溶岩で閉そくされ、大隅半島と陸続したために、現在では一つの半島となつている。北部及び西部は鹿児島湾に面し、北は海上一二^{キロメートル}を隔てて始良地区の諸市町に、西は鹿児島市に對峙してゐる。その海上の距離は桜島港から鹿児島市小川町の桜島棧橋まで三・五^{キロメートル}であるが、最短距離でみると、大正溶岩の西端から鹿児島新港の中央魚類卸売市場岸壁まで二^{キロメートル}桜島町武の西寿寺の海岸から對岸三船神社まで二・四^{キロメートル}である。東部及び西部は鹿児島市東桜島に陸続しているが、西側では鹿児島市野尻町、東側では鹿児島市高免町に接している。

東端（東白浜）

東経二三〇度四一分〇七秒

西端（横山大正溶岩）

東経二三〇度三五分三五秒

表 1 地目別土地利用

58年1月

地目	総面積	畑	原野	山林	宅地	雑地	その他
地積	3,215 ^{ha}	703.8	102.4	321.9	78.1	65.3	1943.5
比率	100.0 [%]	21.9	3.2	10.0	2.4	2.0	60.5

南端（赤水）

北緯三一度三三分

五八秒

北端（東白浜割石崎）北緯三一度三

七分三四秒

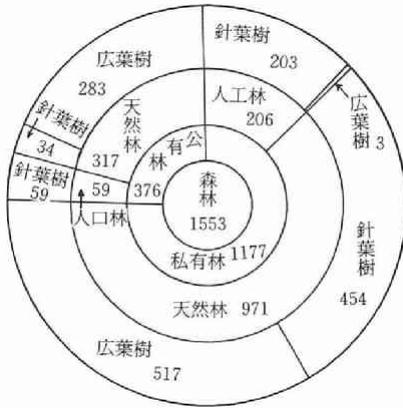
この外に鹿児島市持木町燃崎の沖一^{キロメートル}に沖小島と、鹿児島市高免町浦之前の沖一・五^{キロメートル}に新島（通称燃島）とがある。

町の中心となる役場は、桜島町藤野一四三九番地の東経二三〇度三八分一三秒、北緯三一度三六分五八秒に位置する。

面積

桜島町は、桜島の北西部に、標高一、一七^{メートル}の北岳を中心として扇形に広がり、縦軸を北東にもつ菱形をなしている。菱形の縦軸の距離約九・六^{キロメートル}、短軸の距離約五・四^{キロメートル}である。総面積三・二一五^{平方キロメートル}は桜島の面積八、〇〇〇^{平方キロメートル}の四〇・二^割に当たる。

三、二一五^{平方キロメートル}のうち約二五^割に当た



七七四畝は大正溶岩に覆われ、七十年を経た現在も山頂近くに松の木やヤシヤブシが群生するだけで海岸近くになるにつれて、植物もススキ・タマシダ・イタドリ程度で溶岩が累々と連なっている。したがって生業に利用出来ない土地は、現況で全体の五〇畝以上を占めている。地目別土地利用状況は表1に示すとおり、田地は全くなく、扇状地帯に全体の約二二畝に当たる七〇四畝の畑地がある。実耕地面積は、昭和五十六年の統計では六六二・六畝で、うち樹園地が八九・五畝、五九三畝を占める。二・五畝、一六・六畝にネギ、ホーレン草、大根等の蔬菜類が栽培されており残り八・〇畝、五三畝は休耕地となっている。(昭和五十七年度桜島の農林水産業)

山林は地目別では三二一・九畝となっているが、原野または溶岩上の樹林その他を含めると一、五五三畝となる。(昭和五十七年度桜島の農林水産業)

農林水産業)。このうち私有林二、一七七、公有林三七六畝で、上図のように分類される。宅地七八・一畝は、赤水から白浜まで十の集落が海岸沿いに帯状に散在している。

第二節 地勢

桜島の起源と地質

本町域の土壌は桜島岳の噴出物に覆われた土壌で、大部分が浮石れきに富む砂土壌であり、浮石れき層が二層にも及ぶところがある。桜島の北西部を占める本町域は北岳の噴出物による堆積層からなり、砂れき質ながら比較的耕地に富んでいる。

桜島を含む鹿児島湾の地質について、福山博之(東京大学理学部地質学教室)・小野晃司(地質調査所環境地質部)氏は次のように記述している(桜島火山地質図・一九八一)

鹿児島湾は東西の幅二〇キロ、南北の長さ七〇キロの細長い湾である。東西両岸には急な崖が続き、水深は二〇〇メートル以上あって、日本の内湾としては異例に深い、鹿児島湾とそれから北へ延びる地域は鹿児島地溝と呼ばれ、第四紀の初めから、その東西両側に比べて相対的に

沈降を続けてきた。この鹿児島地溝に沿って北から霧島・桜島・開聞岳などの活火山や温泉などが並んでいる。

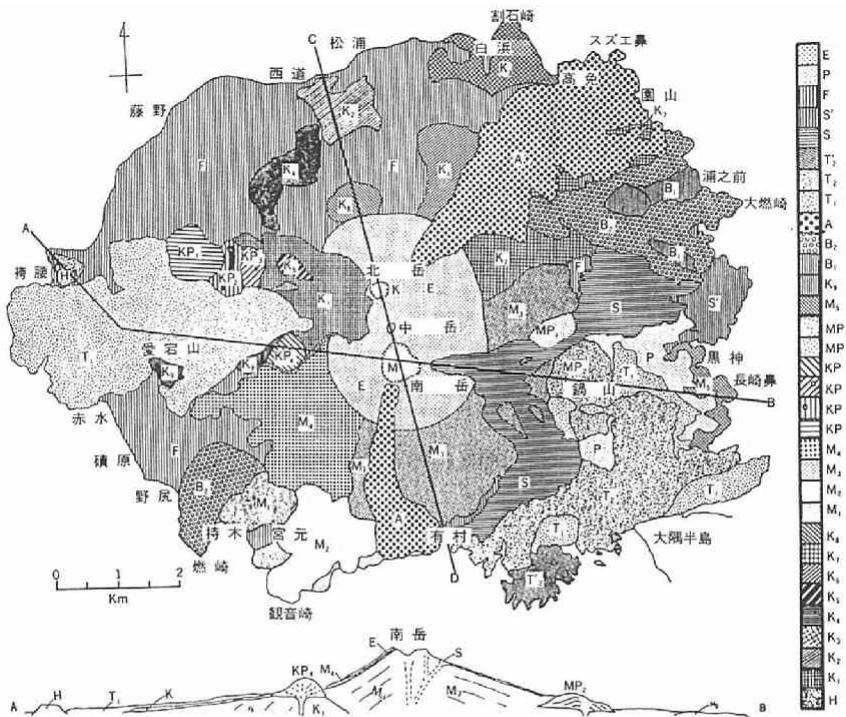
始良カルデラは桜島より北の鹿児島湾の奥の部分にあり、火山性の陥没地である。今から約二万二千年前にこの地域に大噴火が起こった。この活動によって大隅降下軽石・妻屋火砕流・入戸火砕流など大量の地質が噴出し、その結果始良カルデラが生まれた（南九州に広く分布するシラスの大部分は入戸火砕流堆積物である）。始良カルデラの周囲には、このカルデラができるより前に噴出した多数の噴出物が発見されており、この地域には最近の約百万年間は火山活動が断続しつづき起こっていて、日本でも最も火山活動の著しかった地域であることがわかる。カルデラ北東部の海底から二〇〇度C以上の火山性ガスが現在も噴出していることが発見されている。桜島火山は始良カルデラの南縁に生じた火山である。桜島火山が火山島として姿を現わしたのは約一万三千年前と推定される。火山島は噴火活動とともに成長してきたが、中央部の急峻な山体の頂上部に北岳・中岳・南岳の火口が南北に並んでいる。最高頂は北岳で一・一一七がある。主山体の海拔四〇〇—五〇〇だから上部は二三—三〇度の急斜面からなり、それより下は三一—一〇度

の緩斜面が海岸まで続いている。全体としてみると、北岳を中心とする北岳成層火山が先に生じ、南岳成層火山が後から生長したもので、中岳火口は南岳火口の途中に生じた側火山と考えられる。山体の周囲には多くの側火山・側火口がある。歴史時代の溶岩（文明・安永・大正・昭和の溶岩）はすべて側火口から噴出している。

桜島町の地形の基盤となつている溶岩流は大正溶岩流を除けばすべて北岳噴出の溶岩流で表面は既に照葉樹に覆われているが、近年になつて降灰によって地表に堆積した灰が雨水の浸透を阻害し、山腹の侵食が土石流となつて涸れ川を挟む流域の住民に脅威を与えている。

南岳の火口及び側火山による溶岩流は殆んど、現在では鹿児島市の行政区に属する東桜島地区に流れている。文明の噴火（一四七一—一四七九）は野尻と湯の前を結ぶ線上に噴火し、燃崎と大燃崎を形成した。また安永の噴火（一七七九—一七八二）は古里と高免を結ぶ線上に火口を生じ、溶岩は南側では古里・有村を覆い、北側では園山を越えて海中に流出、スズエ鼻を形成した。また海底が隆起し五つの島（新島）を産み出した。

最近の最も大きな噴火である大正三年（一九一四）の噴火は南岳の南東鍋山付近と西側引の平を結ぶ線に列を



桜島地質図の記号説明

H 樺懸火砕流堆積物, K₁ 北岳火山砕屑物, K₂ 松浦溶岩流, K₃ 割石崎溶岩流, K₄ 藤野溶岩流, K₅ K₆ 溶岩流, K₇ K₈ 溶岩流, K₉ K₁₀ 溶岩流・火山砕屑物, K₁₁ K₁₂ 溶岩流, M₁ 宮元溶岩流, M₂ 観音崎溶岩流, M₃ 南岳溶岩流・火山砕屑物, M₄ M₅ 溶岩流, KP₁ KP₂ 溶岩円頂丘, KP₃ 湯の平軽石丘, KP₄ 春田山軽石丘, KP₅ 引の平溶岩円頂丘, MP₁ 権現山溶岩円頂丘, MP₂ 鍋山軽石丘, M₆ 長崎鼻溶岩流, K₁₃ 愛宕山溶岩流, B₁ 文明Ⅰ溶岩流, B₂ 文明Ⅱ溶岩流, A 安永溶岩流, T₁ 大正Ⅰ溶岩流,

T₂ 大正Ⅱ溶岩流, T₃ 大正Ⅲ二次溶岩流, S 昭和溶岩流, S' 昭和二次溶岩流, F 扇状地堆積物, P 降下火砕堆積物, E 最近の噴出物。

桜島の基盤H, 北岳を構成するものK₁—K₈, 南岳を構成するものM₁—M₄, 寄生火山(側火山)(溶岩円頂丘・軽石丘) KP₁—KP₅, MP₁—MP₂, 古期山腹溶岩流 M₅・M₆, 文明溶岩 B₁・B₂, 安永溶岩(南岳から流出) A, 大正溶岩 T₁・T₂・T₃, 昭和溶岩 S・S'。福山(1978年)原図による。一部簡略化した。

なして火口を生じ、溶岩は下降を続け南東側の溶岩流は瀬戸・脇・有村の部落を埋没し、瀬戸海峡を埋めて大隅半島と連結して、桜島は島ではなく、大隅半島に連なる一つの半島と化してしまった。この間の経過を更に審か(まびら)にみてみると、大正三年一月十二日早朝、南岳頂上から白煙、南海岸の脇・有村等で熱湯を噴出したあと、十時ごろ南岳南西側山腹(高さ五七〇m)から噴火、約十分後に南東側山腹(高さ四七〇m)からも噴火が始まった。噴煙は八、〇〇〇mに達し、爆発の極盛時は十三日の午前零時—一時三十分であった。放出された火山灰・軽石で

黒神部落は殆んど埋没、午後八時ごろ西側火口から、十四日朝、南東側火口から溶岩流出が始まった。西火口からの溶岩流出は数日で止まったが、南東側溶岩が降灰を続け一月末旧海岸より一・二キ^ロ前進して、前述のように、瀬戸海峡を閉そくしてようやく停止した。南東側火口からは二月に入つて再び溶岩が流出し、海岸線の前進は年末まで続いた。大正四年（一九一五）三月末から四月初めに溶岩前縁から二次溶岩流出が起こつた。

昭和二十一年三月九日、南岳東斜面（高さ八〇〇^ミ）から溶岩流出、溶岩は東と南に分流、四月五日黒神海岸に、五月二十一日有村海岸に達した。

現在昭和溶岩・大正溶岩は、巨岩塊で覆われたはじめの表面地形をほぼ残しているが、大正溶岩には全面的に、昭和溶岩の一部にも植物の生長が始まっている。安永溶岩の表面はすでに森林に覆われ、樹木のない所でも表層部には安永以後の火山灰が厚く堆積して、大きい岩塊がその表面に顔を出しているのみである。文明溶岩では溶岩堤や溶岩じわのような大きい起伏は明瞭に残されているが、個々の岩塊は灰に覆われてみえない。こうして溶岩流の表面は後の堆積物に覆われて、古い程微細な地形的特徴は次第に失われていく。

桜島火山は中腹以上の急傾斜の部分が、主に火砕物の固結していない累積によつてできているので、侵蝕をうけやすい。山腹に一たん細い谷（雨裂）ができると、大雨のために谷は深く削られ、また谷頭が上方へ延びる。そして大量の土砂を土砂流として流しだして、山麓の緩斜面に堆積させて扇状地を形成する。北岳の西面には谷が深く切りこみ、谷の出口には広い扇状地が発達している。北岳北面の山麓部では前縁の崖を残して溶岩流の表面はこのような扇状地^{扇状地}に覆われかかっている。一方、島の西―西南面では、大正溶岩をはじめ南岳の新しい溶岩類が扇状地礫層を覆つてその上を流下しており、侵食と火山活動による山体の形成とがくり返して行われていることを示している。

桜島火山の岩石は輝石安山岩及び輝石デイサイトと呼ばれるものであるが、安山石とデイサイトの二種類の異なつた岩石があるというのではなく、全体として化学組成には多少の幅があつて SiO_2 が五七〇―六七〇の範囲にわたりそのうち SiO_2 の少ない方（六二〇以下）を安山岩 SiO_2 の多い方（六三〇以上）をデイサイトと区分したものである。

桜島火山の各溶岩流の分析値が安藤・山口氏によつ

溶岩流の分析値

	1	2	3	4	5	6	7	8	8資料の平均値
SiO ₂	61.24	59.07	62.13	64.44	66.62	67.17	60.84	64.77	63.285
TiO ₂	0.72	0.71	0.77	0.77	0.77	0.40	0.69	0.60	0.679
Al ₂ O ₃	16.76	17.81	16.71	14.72	15.33	16.45	16.65	15.86	16.286
Fe ₂ O ₃	2.42	1.02	1.98	1.95	0.94	0.87	2.51	1.51	1.650
FeO	4.84	5.90	4.46	4.64	4.14	3.20	4.41	4.22	4.454
MnO	0.13	0.08	0.09	0.13	0.11	0.10	0.16	0.18	0.123
MgO	2.69	3.41	2.26	1.73	1.31	1.57	3.04	1.88	2.236
CaO	6.62	7.57	6.34	5.63	5.00	4.39	7.02	5.70	6.034
Na ₂ O	2.81	3.20	3.29	3.76	3.55	3.38	2.90	3.34	3.279
K ₂ O	1.49	1.42	1.74	1.83	1.77	2.05	1.34	1.69	1.666
P ₂ O ₅	0.20	0.19	0.21	0.22	0.26	0.09	0.21	0.34	0.215
H ₂ O+	0.17	0.18	0.64	0.08	0.22	0.48	0.20	0.33	0.308
H ₂ O-	0.16								
ToTal	100.25	100.57	100.62	99.90	99.78	100.15	99.97	100.42	100.215

1. 昭和溶岩：黒神
 2. 大正溶岩：有村
 3. 大正溶岩：引ノ平西方
 4. 安永溶岩：北東海岸
 5. 文明溶岩：燃崎
 6. 権現山溶岩：権現山(M.P.)
 7. 南岳溶岩：有村北方
 8. 割石崎溶岩：高免南

分析表 1 : 安藤・武
 2～8 : 山口謙次

て、示されている。各溶岩流の成分表に示されるとおり大差はない、桜島岳の溶岩として表現するために平均の百分比を上表に挙げた。例えば SiO₂ は六二・三三である。

〔参考〕 鹿児島大百科事典

第三節 人口

幕藩時代の人口

幕藩時代の桜島は大隅郡桜島郷と呼ばれ、島の村落は十九村（武村、古里村、湯ノ村、西道村、松浦村、二俣村、白浜村、脇村、高免村、瀬戸村、黒神村、有村、野尻村、赤水村、横山村、小池村、赤生原村、藤野村、沖之島村）となっており、東西桜島を一括して取り扱っている。そのために現在の桜島町に属する人口を年次的にその動態を把握することはできないが、「薩隅日地理纂考」によると東西桜島の人口は、士族二、七七二人（男一、四〇四人、女一、三六八人）、卒三一人（男一五人、女一六人）、平民八、六二六人（男四、三八九人、女四、二三七人）、総計一万一、四二九人、戸数二、一二五軒となっている。

桜島町人口の推移

西桜島村の人口は明治二十八年（一八九五）に九、九

人口と世帯数の推移

年	世帯数	男	女	計	昭和30年(国調)に対する指数	備 考
明治28 (1895)	1,909			9,921	129.4	鹿児島県統計年鑑
33 (1900)	1,916	5,164	5,505	10,669	139.2	〃
40				12,005	156.6	〃
大正2				13,105	170.9	大正3年噴火50年誌
3 (噴火前)				13,037	170.1	〃
3 (噴火後)				6,296	82.1	〃
4 (1910)				5,274	68.8	〃
7				8,278	107.9	〃
9 (1915)	1,098	2,740	3,146	5,886	76.8	国 調
14 (1920)	1,125	2,928	3,112	6,040	78.8	〃
昭和5 (1930)	1,144	3,124	3,440	6,564	85.6	〃
10 (1935)		3,179	3,367	6,546	85.4	〃
15 (1940)	1,194	3,022	3,307	6,329	82.6	〃
21		3,723	4,460	8,283	108.0	大正3年噴火50年誌
22		3,723	4,252	7,975	104.0	〃
25 (1950)	1,596	3,796	4,054	7,790	101.6	国 調
28				7,706	100.5	大正3年噴火50年誌
30				7,666	100.0	上段は国調下段は大正3年噴火50年誌
				7,791	101.6	〃
31				7,851	102.4	〃
32				7,773	101.4	〃
33				7,696	100.4	〃
34				7,718	100.7	〃
35 (1960)	1,572	3,398	3,863	7,261	94.7	〃
				7,640	99.7	〃
36				7,629	99.5	大正3年噴火50年誌
37				7,706	100.5	〃
38	1,622	3,358	3,851	7,209	94.0	桜島町人口世帯数調
39	1,627	3,315	3,903	7,218	94.2	〃
40	1,637	3,243	3,851	7,094	92.5	上段は国調
	1,658	3,338	3,876	7,219	94.2	〃
41	1,700	3,396	3,957	7,353	95.9	桜島町住民台帳
42	1,711	3,435	3,932	7,367	96.1	〃
43	1,736	3,419	3,900	7,319	95.5	〃
44	1,776	3,404	3,917	7,321	95.5	〃
45 (1970)	1,753	3,175	3,761	6,936	90.5	上段は国調
	1,782	3,324	3,850	7,147	93.2	〃
46	1,796	3,289	3,817	7,106	92.7	〃
47	1,824	3,304	3,819	7,123	92.9	〃
48	1,827	3,246	3,803	7,049	92.0	〃
49	1,820	3,190	3,724	6,914	90.2	〃
50	1,784	2,997	3,566	6,563	85.6	上段は国調
	1,833	3,070	3,648	6,718	87.6	〃
51	1,856	3,052	3,731	6,783	88.5	〃
52	1,857	3,011	3,696	6,707	87.5	〃
53	1,854	2,872	3,491	6,363	83.0	〃
54	1,846	2,846	3,420	6,266	81.7	〃
55 (1980)	1,791	2,779	3,319	6,098	79.5	上段は国調
	1,853	2,811	3,340	6,151	80.2	〃
56	1,858	2,805	3,316	6,121	79.8	〃
57	1,891	2,776	3,280	6,056	79.0	〃

二一人であったものが、一万人を超えたのは明治三十年であり、明治三十二年（一八九九）には一〇、四九〇人となった。以後次第に増加して、噴火の前年大正二年（一九一三）には一三、一〇五人までになった。大正三年噴火誌によると、同年の噴火前の人口の二三、〇三七人あったものが、噴火後には六、二九六人と半数以下に激減した。噴火後移住政策がとられ、大正四年の調査では五二七人にさらに減少した。しかし移住した村民のうち相当数が再び桜島へ帰島したことにより、大正七年（一九一八）の調査では八、二七八人まで増加している。大正末期から昭和の初期には満州・朝鮮・台湾など海外植民地へ国の政策で雄飛する者が増えはじめ、次第に人口が減少、七千人台を割り、ことに昭和初期の十五年、戦争が起こると兵役に従軍する者も多くなり、六、三二九人に減少している。

昭和二十年八月、第二次世界大戦が敗戦の結果終結すると、軍人は復員し、満州・朝鮮・台湾など海外からの引揚者がぞくぞく帰還したため昭和二十一年には大正噴火後最多の八、二八三人にふくれ上がった。世情が落ち着くに従い、村外へ職を求め出てゆく者が増え、次第に人口が減っていったが、減少傾向は緩慢で過疎現象を心

配するほどのことではなかった。特に降灰の被害がひどくなった昭和四十七年以後は鹿児島市に移住する者が多くなり、昭和五十八年現在六千人を割ったため、町は人口減少をくいとする施策を練っている。

昭和五十五年国勢調査による町の人口

昭和五十五年十月一日午前零時現在の桜島町の人口を、昭和五十年十月一日の国勢調査による人口またはそれ以前の国勢調査人口と比較してみると、

総人口

桜島町の総人口は六、〇九八人で、昭和五十年に比較すると、四六五人（七・二割）の減となり、昭和四十五年に比較すると八三八人（二二・一割）の減となっている。

男女別人口

人口を男女別にみると、男二、七七九人（四五・六割）、女三、三一九人（五四・四割）で女の方が五四〇人多い。これを昭和五十年と比較すると、男二一八人（七・三割）減、女二四七人（六・九割）の減となっている。

世帯数と一世帯当たりの平均世帯員

世帯数は昭和五十五年の国勢調査によると、一、七九

最近の人口動態

(11月1日から
10月31日まで)

年次	自然動態			社会動態			増減
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減	
48	107	69	38	418	530	-112	-74
49	100	69	31	431	597	-166	-135
50	86	61	25	374	595	-221	-196
51	79	54	25	311	457	-146	-121
52	63	62	1	308	385	-77	-76
53	63	55	8	320	405	-85	-77
54	50	50	0	303	401	-98	-98
55	47	69	-22	269	362	-93	-115
56	50	62	-12	358	456	-98	-110
57	29	56	-27	353	391	-38	-65

一世帯で、昭和五十年に比べ七世帯(〇・四割)が増加し、昭和四十五年に比べ三八世帯(二・二割)が増加している。桜島町人口世帯数調べにおいても昭和四十八年から五十七年までの十年間に六四世帯が増えている。人口の減少傾向と反比例して世帯数が増加していることは核家族化が進んでいることを示している。

一世帯当たり平均世帯員数は昭和五十五年三・四人昭和五十年三・七人、昭和四十五年四・〇人である。

年齢階層別

構成人口

年齢階層別構成人口をみると、桜島町では図(10頁)に見られるように十五歳以下の幼年人口の占める割合が、年々極端な減少傾向を示し、六十五

世帯数人口調

(昭和57年10月31日現在)

地域名	世帯数	人口		
		男	女	計
赤水	166	277	280	557
小池	289	444	513	957
赤生原	172	269	304	573
武西	188	237	290	527
武東	117	163	197	360
藤野	174	268	326	594
西道	232	305	368	673
松浦	110	161	193	354
二俣	90	134	158	292
西白浜	126	187	235	422
東白浜	201	305	390	695
新島	26	26	26	52
計	1,891	2,776	3,280	6,056

歳以上の高齢人口の割合が年を追うごとに増加している。このことは老人の長命という喜ばしい現象ではあるが、半面若い生産人口の流出と、出生者数の減少を示し、町民の高齢化が進んでいることを物語っている。

産業別就業人口

桜島町における十五歳以上の就業者数を分類すると、図に示したように第一次産業の就業者が極端な減少を示し、第二次産業、第三次産業に転業している者が増加していることがわかる。昭和五十五年の国勢調査によると、第一次産業では、農業と水産業だけで、そのうち八一割を農業で占めている。第二次産業では建設業が最も多く六〇割を占め、第三次産業では卸小売業が最も多く三六・九割、次いでサービス業の二三・八割、運輸通信

年齢階層別人口（国調）

年度	幼年人口	生産年齢人口	老年人口	総人口
昭35	2,545人 (35%)	4,115人 (57%)	601人 (8%)	7,261人
昭45	1,889人 (27%)	4,349人 (63%)	698人 (10%)	6,936人
昭50	1,593人 (24%)	4,248人 (65%)	722人 (11%)	6,563人
昭55	1,295人 (21%)	3,985人 (65%)	818人 (14%)	6,098人

男女15歳以上就業者数分類（国調）

年度	1次産業	2次産業	3次産業	総就業者数
昭35	2,549人 (68%)	352人 (10%)	810人 (22%)	3,771人
昭45	1,803人 (51%)	380人 (11%)	1,363人 (38%)	3,545人
昭50	1,054人 (32%)	632人 (20%)	1,564人 (48%)	3,250人
昭55	900人 (29%)	551人 (18%)	1,612人 (53%)	3,063人

業が二三・二割となっている。

第一次産業がこれ程極端に減少しているのは、昭和三十年に桜島が噴火し、第一次産業に大きな影響を与え、町民は農業を生業として維持できなくなり、農業を兼業にして鹿児島市に職を求めた結果によるものである。それを裏づけるものとして、昭和三十五年の国調と、五年のそれとを比較するとき、農業の就業者数は全就業者数の六三・九割から二三・七割に減少したのに対し、卸・小売業・サービス業の合計就業者は〇・八割であったものが三一・九割となっている。

第四節 字名考

桜島と大字考

古書には桜島のことを向島（向之島）と書かれたものが多く、桜島が鹿児島に向こうにあるからという説や東西南北いずれにも面しているためという説もある。

桜島という地名の由来については明らかではないがその一つには、桜島忠信が大隅国での任務中、郡司に白髪の翁がいたのを召して過を問いただしたところ、翁は「老いはてて雪の山をばいただけど霜と見るにぞ身はひえにけり」と詠じた。この歌に感じた忠信は翁の罪を許

し、この歌が桜島忠信の名とともに世に広まったために島の名を桜島と呼ぶようになったという。また一説には島の五社大明神社の祭神が木花佐久夜姫であるので、初め咲夜島と呼んでいたものがだんだん訛って桜島に変わったのであろうという。ほかに、桜島山が湧出した時に、海に桜の花が浮んでいたのが桜島と命名したとか、島に桜の木があつたがその島は一夜にして突出して山となつたので、桜島と名付けたとの説がある。(三国名勝図会)

江戸期から明治二十二年(一八八九)までは大隅国大隅郡(北大隅郡)桜島郡と呼ばれていた。

桜島村次の歌

三国名勝図会に記された村次の歌は本府鹿児島から船で横山に渡り、岳の頂を中心に右回りして集落を歌い込んだ歌である。

村次は横山、小池、赤生原

武や藤野と行けば西道

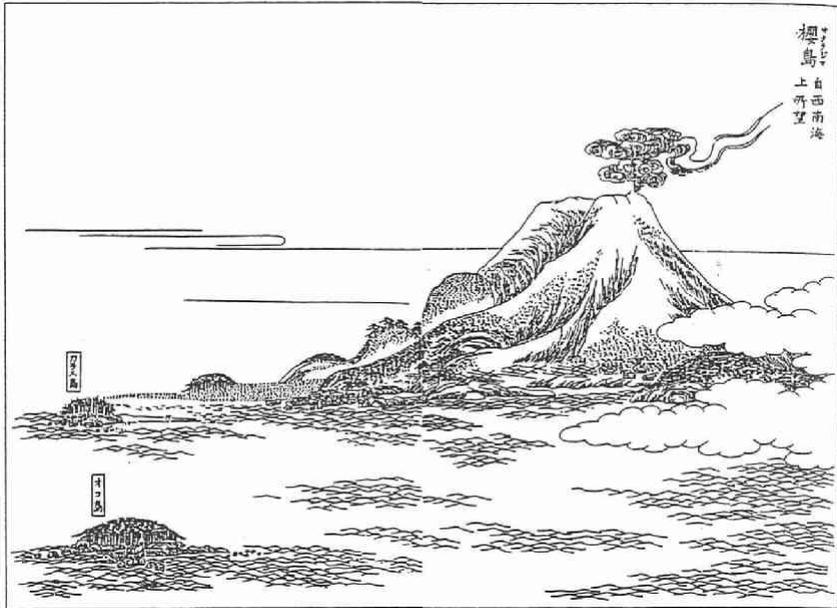
松浦がた二俣こえて白濱や

高免がもとかかる黒髪

瀬戸や脇なごり有村、古里や

湯の村こえて野尻、赤水





櫻島 白西雨海

このほか古老に聞いた村次歌に次のようなものがある。

- 一、心小池に 身は赤生原に
医者をたてしと武の浜
- 二、藤の花とり 西道に行けば
主の来るのを松浦で
- 三、二俣心で出かけてゆけば
波の白浜 古河原願
- 四、高免のろけて 主しや浦の前
昔なじみの 黒神よ
- 五、瀬戸をちよいと出て 脇様呼べば
なさけ有村 古里よ
- 六、ちよいとしばらく 湯の村へんで
末をたのみの持木村
- 七、野尻からんで 赤水くんで
横の山こへ 袴腰

赤水

室町期から見える地名であり、大正三年の噴火によつて、かつての赤水はすべて溶岩の下に埋没し、現在の赤水は噴火後に移住設立された集落である。現在の部落は、調練場の東側に当たっているが、調練場は大正噴火

以前、武術の訓練場として使われたところである。また古老の話によると引の平は秘技の平であり、昔の士が秘技を磨いたところであったと伝えられる。嘉永三年（一八五〇）には御台場が築かれ、明治十年五月、西南戦争の兵乱を避けるための県庁の仮出張所が設けられたことがある。鎮守は愛宕枚聞神社である。また大字赤水に属する新島は安永の噴火で次々にできた島であるが、寛政十二年（一八〇〇）に赤水村と黒神村から二五人を移住させたことよって大字赤水に属することとなった。

横山

南北朝時代から見える地名。横山の集落背後にある城山は長門城の跡で大隅半島に対する要所であった。文明年間から島津忠弘の所領となって数代続いた。元龜年間には鎌田政近が同城を守り肝付氏に備えて功があったという。横山村は鹿児島に近く、海を隔てて近いために諸公子の遊観の場所として使われていた。

鳥島、沖小島は横山村に属し、鳥島には寛永十年（一七九八）に島津家久が創建した巖島神社があったが、鳥島と共に溶岩下に埋没した。巖島神社は後で横山鶴崎に遷宮されたが、昭和四十八年企業部の拡張に伴って現在のゲートの北側に移った。

城山上の三カ所に三台の御台場が置かれていた。戸長役場（村役場）、桜洲小学校、郵便局なども横山にあったが、大正三年の噴火によって村内最大の集落四二〇戸は溶岩の下に埋没してしまった。

小池

江戸期から明治二十二年までは小池村、小池の方崎は穂崎とも書かれている。方崎の庚申塔は寛文五年（一六六五）に庚申供養衆が建てたもので、方崎の鼻から海に押し出され、洲に横たわっていたものを昭和五十七年三月現在の位置に移した。宝永五年（一七〇八）横山との間の道が広くなった（桜島中万扣）。安永の大噴火（一七七九）、天明元年（一七八二）の噴火の際にも六ヶ余りの大波が小池村を襲った。（県災異誌）鎮守は小島神社である。

小池もまた大正三年の大噴火の折には溶岩が畑地八二町歩を埋没し、残る家屋も全焼、噴出物による堆積物も数ヶに及んだ。

赤生原

戦国時代、永禄十二年十一月十三日付けの妙谷寺宛島津義久寄進状の中に、「向之嶋赤生原」として見える。近世時代は「赤尾原」とも書かれている。鎮守は尾地底

神社である。

大正三年の噴火では降灰量は一畝余りに達し、軽石は二〇〜三〇^{セリ}もあり、部落は火災によつて全滅した。

武

戦国期に見える地名で岳と書かれている。近世になり桜島郷武村、岳村が併用して書かれていた。明治二十二年の市町村制度によつて武と確定した。鎮守は諏訪（南方）神社である。

大正の大噴火では降灰が約二〇^{セリ}積もり集落の二七六戸のうち二四四戸が焼失した。

武部落の南東端、武榎川三五〇番地（竹之内正宅）の標高八^ミのところは縄文後期の貝塚がある。主鹹貝塚で、上部土層は（厚さ五〇〜六〇^{セリ}）は市来式土器と少量の西平式土器、貝層（厚さ五〇〜六〇^{セリ}）は市来式土器と少量の鐘崎式土器、貝層下土層（厚さ二〇〜三〇^{セリ}）は指宿式土器と少量の出水式土器をそれぞれ包含する。またこの貝塚から猪、鹿、鳥等の骨、敲（たたき）石なども出土している。

藤野

南北朝期から戦国期にかけて向嶋土藤崎正兵衛文書に、また勝久公御譜等に出て来る。関ヶ原の戦で島津氏

は西軍に属して敗退したが、戦後義弘は藤野に蟄居して徳川氏に恭順の意を示した。慶長六年（一六〇一）四月蟄居の折、義弘公が栽培した揚梅（やまもも）が藤崎宅の庭中にある。その後、寛陽公（島津久光）、宥邦公（島津継豊）が来遊している（三国名勝図会）明治年間に平右衛門が藤野村に植えた櫨の新種は「平右衛門櫨」と称され油が多く垂味が良かった。（県史）

鎮守は地方神社で、藤崎家の先祖刑部九郎公覽の創建と伝えられる。（県神社誌）

桜峰小学校の前身同仁小学校は藤野にあった。

西道

室町期から見える地名で西堂と記されている。西道には、中坊（なかんぼ）とか、寺ん墓原（てらんはかあ）と呼ばれる所がある。近くに五輪の塔、宝篋印塔の群落が発見されていることから、この辺には寺があったものと思われ、西堂も西の堂から発した名前ではないかと想像される。また西道の東の端に半分園と呼ばれる地域があるが、半分園の地名の由来について、古老の言う所によると、昔から西道川はよく氾濫して耕作地や人家を襲った。涸れ川は雨の降る時だけ猛威をふるい、土石流となつて、土砂及び大きな岩塊を平地まで運んでき

た。そして地域の半分を荒廃させた。その時から半分園と呼ぶようになった。また一説には土石流被害があまりにも大きく、時の支配者は上納を半分に負けてくれた。それから半分上納が半分園になり地域の呼び名となったというものである。

鎮守は三柱神社で祭神は月読命である。

元禄、宝永年間（一六九〇～一七一〇）に西道村に藩営の製蠟所が置かれた（県史）。また果樹生産が盛んであったが幕末の頃山本万左衛門の住居前に生えた一本の李は実の着色が早く貯蔵に耐えたため、以後村内外で「万左衛門李」という名称で広く栽培された。明治十四年五月上山惟久外十四人は葡萄の栽培と葡萄酒の醸造を計画、葡萄苗一万本の注文あつた旋方を県庁に出願したが同年十一月計画を変更して苗木の注文を三千本に減じた。大正三年噴火の折、横山にあった村役場が溶岩で埋没したため、同年三月上山源九郎氏宅を、翌大正四年十二月萩原有吉氏宅を役場所在地とした。

松浦

戦国期にみえる地名、天文六年（一五三七）から八年の「島津勝久宛行状」、「樺山玄佐譜」に表われている。

（旧記雑録）

現在松浦芝山にある御岳竜玉権現社ははじめ北岳の九合目付近にあつたが、安永八年の大噴火によつて現在地に遷宮した。祭神を月読命とし、春の彼岸の入りの日に藤野、西道、白浜あたりの町民も「嶽まいり」の行事として、この権現社に参る習慣がある。

明治三十一年には藤野にあつた同仁小学校と白浜にあつた日新小学校が合併して松浦と西道堺の字岩屋に桜峰小学校が設立された。

二俣

戦国期に見える地名。天文八年（一五三九）樺山安芸守が「向之島之内松浦、二俣」とはつきり二つに分けて書いている。（樺山玄佐譜、旧記雑録）天正十三年（一五八五）二月二十六日の「上井覚兼日記」に白浜と二俣に境の論争があつたことが書かれている。

本田正親領二俣と上井覚兼領白浜との境界論争があつて、覚兼と正親は平田豊前守、木脇大炊助三原下総守に論地の検分を依頼した。同記の三月二日の条には「先日三人を頼つて検者に伝えさせたが、桜島の地頭川上源五郎は役人同心に命じて白浜、二俣の百姓の言い分を聞か

せ、其の上各論地を見て『とび石』と申す所が直接見渡す所」と定められた。これに対して本田刑部少輔は納得無く、その日は落ち着きがなかったとあって、本田正親は五月十日に境界論争の結末を不満として二俣を返上しようとしている。

二俣の鎮守は大元神社である。

白浜

白浜は現在、行政的には東白浜と西白浜の二部落に分けられている。

東白浜の方を一般に古良向き(コラムツ)と呼び、西白浜の方を鍛冶屋向(カンジャムツ)と呼んでいる。東白浜は小字川原の方にあるという呼び名であるが、西白浜の方では今に残る小字加治屋の上(カンジャンウエ)から推してもその昔鍛冶屋があつて、その筋を鍛冶屋筋と呼んでいたことから発したものとされている。

江戸期には白浜村と呼んだ。元禄、宝永の頃、(一七〇〇頃)白浜村に住んでいた村山四郎兵衛は陸奥の国会津出身の金山者の言によつて桜島の樫実が製蠟に適することを知り、試みに製蠟させて成功したため、のち年々鹿兒島に蠟を出している。同氏は藩の生蠟垂方、樫木植

方主取に命ぜられ藩宮の製蠟所で働くことになった。垂蠟所ははじめ藤野村に置かれ拡張に従つて順次西道、小池、横山村に移された(県史)。安永八年十月一日の噴火では、白浜村は噴火口に近かつたため、避難した人々の島への復帰は困難で十月中旬まで帰れなかつた。翌九年八月の爆發鳴動では、高さ三丈(九尺)にも及ぶ大波が起こり、同十年にも大波が起こつたが大事には至らなかつた。天明元年三月すでにできていた新島近辺で起こつた噴火では泥を吹きあげて、津波が起こり、村民男五人、女一人が波にさらわれて死亡している(県史旧記雑録)。桜峰小学校の前身である日新小学校は白浜にあつた。鎮守は豊受神社である。

第二章 桜島の自然

第一節 動物相

一、陸生動物

桜島は大正三年に陸続する半島になつたが、それまでは鹿兒島湾に浮かぶ島嶼であつた。その島も平穩な島で

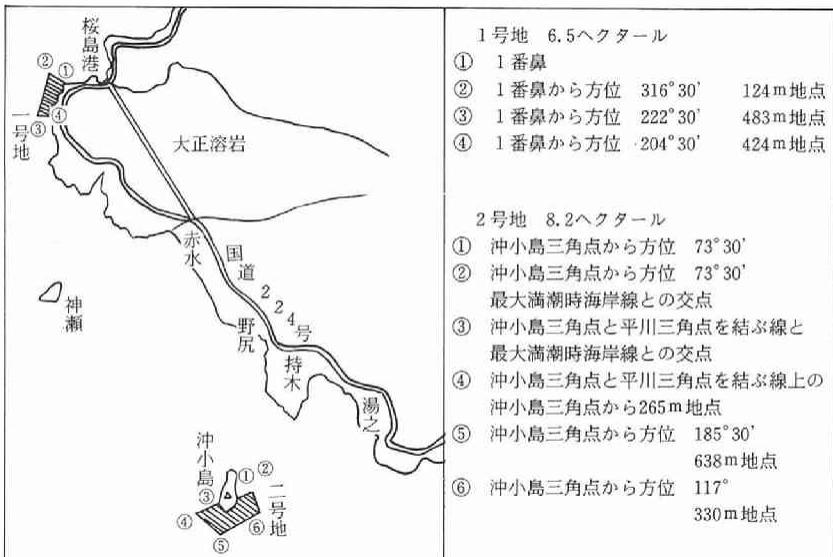
はなく、火山島特有の溶岩と灰に覆われた島であり、他の地域から渡って定着する動物も少なかったと想像される。

武部落にある、有史以前の貝塚からの出土品にイノシシ、シカなどの骨が散見されるところから皆無とは言えないとしても、過去から現在に至るまで定着した野生動物は非常に少ないと思われる。昭和四十年代に一匹の野猿が居るといつて騒がれたことがあったが、これも大隅半島から渡ってきた飼い猿であったことが判明した。このように少ない野生動物の中でタヌキは多い。自動車のヘッドライトに照らされるタヌキを見ることは時々耳にする。

野鳥では、ウミネコ、カラス、トビ、ゴイサギ、ヒヨドリ、イソヒヨドリなどをよく見かけるが、調査された記録を発見できないまま陸生動物については後日の研究をまたねばならない。

二、水生動物

赤水から白浜まで海岸線を有し、いくつかの島嶼をもつ桜島町では、鹹水性動植物に恵まれており、袴腰溶岩地先の一部と沖小島の一部は昭和四十五年七月に国立海



中公園に指定されている。

袴腰溶岩域の地先は、水深四〇メートルの海域に溶岩が流れ込んだため、沖合一〇〇メートルを出ずして、水深四〇メートルの砂礫底に達する急深域である。この溶岩礁は常に潮流に洗われているのでイシサンゴ類、ウミトサカ類、ウミシダ類などの着生動物、巻貝類、瀬魚類が豊富である。

神瀬は平坦な周りを砂礫底で囲まれた島で打ち上げ貝殻または生き貝が多数採集される。沖小島は南部は岩礁で切り立った海岸線を形成するが、北部は緩傾斜で一部砂浜を形成する。

小池から白浜までの海岸は急傾斜の砂礫海岸で着生動物、貝類等貧弱であるが、新島は貝殻について特殊地帯として注目される。というのは新島が安永噴火の折、水深一三〇〜一五〇メートルの海底が隆起した島であり、現在は表面が二メートル程の火山灰に覆われ、樹木も生い茂っているが、その下には厚さ一・五メートルの貝の化石の層があり、その地層から水深一〇〇メートル以深の深海種の化石が生時の色や模様を保存したまま、しかも陸上で採集できるからである。

「鹿児島島の自然」（昭和三十九年鹿児島島の理科教育協会）の中に大迫暢光氏は「鹿児島島の貝類」、平田国雄氏

は「燃島の貝層」、また今井貞彦、中原官太郎氏は「鹿児島県の魚類」と題する小論文を発表し、「錦江湾海中公園調査書」（昭和四十二年鹿児島県）には平田国雄、税所俊郎、大迫暢光（海岸無脊椎動物）今井貞彦、中原官太郎（魚類）、田中剛、糸野洋（海藻）の各氏等が袴腰一帯の動植物について詳述している。これらを参考にして桜島を中心とする海域の水生動物を挙げると、

桜島、神瀬、沖小島の主な海岸動物

1、海綿動物

ムラサキカイメン

2、腔腸動物、石サンゴ類

ハナヤサイサンゴ、クシハダエダサンゴ、アミメミドリイシ、エダミドリイシ、ミドリイシの一種、未詳種ミドリイシ類、キクメイシ、カメノコウキクメイシ、コカメノコウキクメイシ、ノウサンゴ、ハナガササンゴ、シコロサンゴ、ノリコモンサンゴ、サボテンコモンサンゴ、ハマサンゴ、イボサンゴ

3、その他の腔腸動物

チジミトサカ、キバナトサカ、アカバナトサカ、オオトゲトサカ、ヒロウドトゲトサカ、ホソエダトゲトサ

カ、ヤマトトゲトサカ、サンゴイソギンチャク、ミドリイソギンチャク、タテジマイソギンチャク、ハナヤギ、オウギウミヒドラ、ハネウミヒドラ

4、環形動物

ケヤリムシ、イバラカンザシ、ヤッコカンザシ

5、節足動物

カメノテ、イワフジツボ、クロフジツボ、テツポウエビ、イソスジエビ、オトヒメエビ、イセエビ、ヒメセミエビ、トラフカラツバ、コブシガニ、ホシマンジュウガニ、ベニツケガニ、ジャノメガザミ、ショウジンガニ、トゲアシガニ

6、軟体動物（貝類は後述）

アオリイカ、ヤリイカ、コウイカ、イイダコ、マダコ、テナガダコ

7、棘皮動物

オオウミシダ、ニッポンウミシダ、ウミシダの一種、アヤウミシダ、ムラサキヒトデ、スナヒトデ、ガンガゼ、アオスジガンガゼ、シラヒゲウニ、ニシキウニ、ムラサキウニ、ナガウニ、スカシカシパン、ブンブクチャガマ、タコノマクラ、トラフナマコ、ニセクロナマコ、フジナマコ、ムラサキクルマナマコ

8、海鞘類

シロボヤ、ベニボヤ、カラスボヤ、マンジュウボヤ

9、貝類

大迫氏は神瀬の貝類について、普通にみられるものとして、砂浜の打ち上げ貝ではクジヤクガイが最も多く、コシダカガンガラ、ハツユキダカラ、タケノコクチキレ、チャイロカズマキクチキレ、ヨコスジタマキビモドキ、ヒナクチベニ、カノコアサリ、ヒメイナミガイ、ヒリヨウガキ、ホウオウガイ、サメザラモドキを挙げているが、中でも異色なのは、テンロクケボリが混っていることである。この一帯にも満たない小貝は干潮線に生育するキバナトサカに寄生している。キバナトサカは神瀬周辺、桜島溶岩のように湾内でも河川の流入の少ない場所に分布している。テンロクケボリと共に代表されるものはニシキヅノであるが、この方は数が少ない。神瀬の南面は干潮時には露出してタイドプールをともなった礫地帯となるが、貝層はむしろ貧弱で、タイドプールには、ハボウキガイがかなり群生し、礫下にはクロマキアゲエビス、カサウラウズ、ナツモモ、ホソウネボラ、エガイ類、サメザラモドキ、ヒナクチベニなどをみると記している。

この外に桜島町内の海域で次のような生き貝、貝殻などをみる事ができる。

キクコザクラ、ヨメガカサ、ウノアシ、コガモガイ、クモノコガイ、イシダタミ、クボガイ、バテイラ、ニシキウズ、コシダカギンタカハマ、ギンタカハマ、サザエ、スガイ、アマオブネ、タマキビ、アラレタマキビ、マキミゾグルマ、ミミズガイ、オオヘビガイ、リュウグウカズラ、カスリカニモリ、カニモリガイ、クマサカガイ、フドロ、トミガイ、リスガイ、マンジュウガイ、ツメタガイ、ナシジダカラ、メダカラガイ、ハナマルユキ、クログチキヌタ、ウラシマガイ、ウネウラシマ、カコボラ、オキニシ、ウズラミヤシロ、ヤツシロガイ、センジュモドキ、レイシ、イボニシ、アカニシ、ホネガイ、アツキガイ、トクサバイ、シマアラレミクリ、ミクリガイ、セコボラ、バイ、ミガキボラ、ムギガイ、マツムシ、フトコロガイ、ムシロガイ、フトウネナガニシ、イトマキボラ、イトマキナガニシ、テングニシ、ベニマキ、ホザキリュウグウボタル、ウラシマボタル、リュウグウボタル、エガイコベルトホネガイ、マルサルボウ、アカガイ、ホトトギスガイ、イシカワシギノハシ、ヒバリガイ、ムラサキイガイ、イガイ、クロシユミセン、ア

コヤガイ、タイラギ、イタヤガイ、ツキヒガイ、ヒオウギガイ、ウニメンガイ、チリボタン、マガキ、スミノエガキ、ウスユキミノ、トヤマガイ、サルノカシラ、モクハチアオイ、ハマグリ、マツヤマワスレ、オキシジミ、アサリ、サツマアカガイ、バカガイ、カノコアサリ、マテガイ、スズガイ、ツツガキ

平田氏の燃島産半化石貝類目録によると、

ニッポンクチキレエビス、コウシスソキレ、ハブタエスソキレ、トサスソキレ、ヤブレガサ、フネスソキレ、ハグルマシタダミ、サンシヨウガイモドキ、ヒメマキアゲエビス、マキアゲエビス、*Groessea moeshinaensis*、ハリサザエ、ワニガワザンシヨウ、ミヒカリカタベ、ワタゾコシロガサ、ニッポンワタゾコシロガサ、テラマチワタゾコシロガサ、ミミズガイ、リュウグウカズラ、ハナゴウナの一 種、クリムシガイ類七種、トウガタナワボラ、ネジヌキ、キヌガサガイ、クマサカガイ、エゾタマガイ、ウチヤマタマツバキ、リスガイ、ザクロガイの一 種、シラタマ、ヒメカブトボラ、コシダカフジツ、カコボラ、ククリボラ、ナガスズカケボラ、ナンカイボラ、ヤツシロガイ、ウズラミヤシロ、カゴメガイ、ヨウラクヒレガイ、ハツキガイ、アツキガイ、オシロイツノオリ

イレ、ツノオリイレ、カゴメヌカボラ、コウダカマツムシの一種、アラレバイ、ヒメトクサバイ、ネムリガイ、セコボラ、ハナムシロ、ナカヤマムシロ、タテヤマヨウバイ、フトウネナガニシ、リュウグウボタル、フテガイ、チュウカフデ、カラフデキザミタカラゴメ、ハシナガイグチの一種、ツヤシヤジク、ヒメシヤジク、ホシシヤジク、マキモノシヤジク、モミジボラ、外ぐだまきがいの科の不明種二種、オルビニイモ、アコメガイ、スギモトイモ、ヒメフトギリ、フトギリ、カズマキクチイレ、チヨウジガイの一種、外とうがたがいの科の不明種六種、オオキジビキガイ、カワムラキジビキガイ、ナカヤマキジビキガイ、ニイノマメウラシマ、オオベニシボリ、シリプトカイコガイ、ヒメコメツブガイ、タマゴマメヒガイ、キノクニマメヒガイ、マメヒガイの一種、ワタゾコメツブガイ、クダタマガイ、ササノツユ、クリイロカメガイ、ユキツノガイ、ヒメナガツノガイ、ロウソクツノガイ、ツノガイ、オニキラガイ、シジミナリクルミガイ、アラレボリロウバイ、スタレソデガイ、ゴルドンソデガイ、ヒラソデガイ、オトギノワシノハ、シコロエガイ、ワタゾコエガイ、モエジマミエガイ、ベニグリ、ナミジワシラスナガイ、キビガラガイ、ワタゾ

コナデシコ、ヒヨクガイ、クマドリツキヒ、モトリニシキ、ハナイタヤ、トウキヨウホタテ、オオナデシコ、オオハネガイ、ハネガイ、ユキミノガイ、フクレユキミノ、ニッポンユキバネガイ、ベッコウガキ、モモイロトマヤ、ヒラセフミガイ、フミガイ、コウホネシオガマ、オトギノハナシガイ、ツキガイモドキ、オオツキガイモドキ、チジミウメ、ワタゾコツキガイ、アサヒザル、シマキンギョ、オオスタレガイ、ビノスモドキ、カガミガイ、チゴシラオガイ、ワタゾコヒメ、カノコアサリ、ヒラカモジガイ、シロキヌタアゲマキの一種、アコヤザクラ、キヌマトイガイ、コダキガイ、ヒナクチベニ、クチベニデ、オビクイガイ、ハマユウツツガキ、カゴシマシヤクシガイの一七九種類があげられている。

10、魚類

桜島に生息する魚類といっても、桜島の漁船が対岸の三船や始良、または鹿児島湾中央部まで出漁し、桜島に持ち帰るものもあって、桜島水域としての一線を画することはできない。今井、中原氏の錦江湾産魚類目録（一九六九錦江湾海中公園調査書）は開聞岬と佐多岬とを結ぶ線より内側で採集された魚四〇一種を挙げているが、このうち外洋性で喜入、垂水を結ぶ線以南でしか見られ

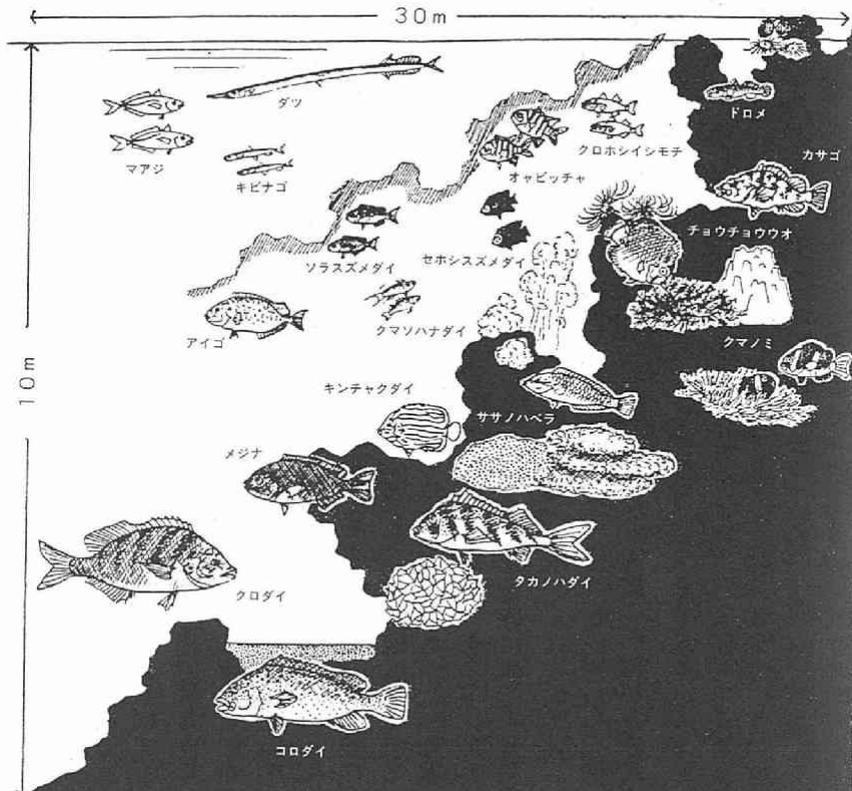
ない種類を省いてここに挙げる。また瀬魚類については前記調査による魚の生息状態を列記する。

大正溶岩域

溶岩礁が常に潮流に洗われているので、イシサンゴ類、ウミトサカ類、ヤギ類、ウミシダ類などの着生動物類、それにウミウチワ、ナガミルなどの海藻類が繁茂し、岩礁性魚類に絶好の生息場となっている。潮間帯に見られる潮だまりは、水面下で外水面と通じているので、真の潮だまりではなく、常に水位は外水面と同じで、干潮と共に消失する。満潮時に潮だまりとなるにすぎないが、ここには小さなオヤビッチャ、ドロメ、アゴハゼ、ナベカ、クモギンポ、メジナ、カゴカキダイ、チョウチョウウオなどがみられる。

外水面の岩礁地帯では、いたる所にソラスズメダイ、セホシズメダイ、クロホシイシモチの群がみられる。その他にオヤビッチャ、シマスズメダイ、シチセンスズ

桜島本島袴腰魚類相垂直分布模式図



メダイなどが群泳しているが、底部岩礁の裂け目などに着生しているサンゴイソギンチャクの周辺にはクマノミのつがいが見られる。

テンジクダイ類ではセホシスズメダイの外にコスジイシモチ、ネンブツダイ、フタスジイシモチ、リュウキウイシモチなどが生息している。

ベラ類ではササノハベラが最も多く、岩礁のいたるところにみられるが、このほかブダイ、ホンベラ、カミナリベラ、オトメベラ、オハグロベラ、キュウセンなどが生息している。

チョウチヨウチオ類ではチョウチヨウチオが最も多くキンチャクダイ、ゲンロクダイがみられる。また六月から十月ごろまで五^{ツギ}以下^{ツギ}のトゲチヨウチヨウチオ、トノサマダイが現れるがこれらは冬期には姿を消し、成魚はみられなくなる。カゴカキダイは最も普通で十尾内外の群が岩礁付近でよく見られる。

クマソハナダイはこの付近で最も美しい魚のひとつで雌魚は淡い桃色一色であるが、雄魚は桃紫色の体側中央に大きな赤紫色の斑があり、尾鰭の先が糸状に伸びている。四十〜五十尾の群が多く、特に赤、黄、紫のウミトサカ類の群落の周辺に、潮にさからって静止している様

はまことに華やかな光景である。

岩礁域ではニザダイ、キタマクラ、ハコフグ、ハリセンボン、カサゴなどがみられる外に五^{ツギ}ぐらい深部ではタカノハダイ、オオモンハタ、コロダイ、スズキ、アイゴ、それに体長三〇^{ツギ}以上もあるメジナの群もみられ、この地域はメジナ、カサゴ、ササノハベラなどの絶好の釣場となっている。

神瀬・沖小島

神瀬のまわりは砂礫水底域でどこどこに溶岩が顔を出して小さな瀬が形作られている。瀬のあるところでは前述の大正溶岩域と同様の魚種がみられるが、砂底域ではクロサギ、ヨメヒメジ、ダテハゼ、ハナハゼ、アカエイがみられる。ヒラメ、コモンフグは砂に体を半分埋めているのを見ることができ。

沖小島は南部で岩礁域、北部では砂底域を形成し、南部では溶岩域と、北部では神瀬と同様の魚相がみられる。

魚類目録

ヌタウナギ（ヌタウナギ科） エドアブラザメ（カグラザメ科） ネコザメ（ネコザメ科） ナヌカザメ、タイワンザメ、ヒョウザメ（トラザメ科） オオセ、トラ

フザメ、テンジクザメ(テンジクザメ科) シュモクザ
メ(シュモクザメ科) ウバザメ(ウバザメ科) ホシ
ザメ、シロザメ(下チザメ科) カスザメ、コロザメ
(カスザメ科) シビレエイ、ネムリシビレエイ(シビ
レエイ科) サカタザメ(サカタザメ科) ウチワザメ
(ウチワザメ科) ガンギエイ、メガネカスベ(ガンギ
エイ科) ヤッコエイ、アカエイ、ヒラタエイ、ツバク
ロエイ(アカエイ科) トビエイ、マダラトビエイ(ト
ビエイ科) コノシロ(コノシロ科) ウルメイワシ、キ
ビナゴ(ウルメイワシ科) マイワシ(ニシン科) カ
タクチイワシ(カタクチイワシ科) ネズミギス(ネズ
ミギス科) アユ(アユ科) カゴシマギス、ニギス
(ニギス科) キュウリエソ(ヨコエソ科) オキエソ
マエソ(エソ科) イワハダカ(ハダカイワシ科) ナ
メハダカ(ハダカエソ科) ゴンズイ(ゴンズイ科)
ウナギ、オオウナギ(ウナギ科) ゴテンアナゴ、クロ
アナゴ、マアナゴ、ギンアナゴ、ツマグロアナゴ、アイ
アナゴ(アナゴ科) ハモ(ハモ科) ホタテウミヘ
ビ、スソウミヘビ、タツウミヘビ、ダイナンウミヘビ
(ウミヘビ科) ヒレジロアナゴ(メクラアナゴ科)
アミウツボ、ニセゴイシ、ウツボ(ウツボ科) ダツ

(ダツ科) サンマ(サンマ科) サヨリ(サヨリ科)
ツマリトビウオ、アヤトビウオ、アリアケトビウオ、
トビウオ(トビウオ科) アカヤガラ(ヤガラ科) サ
ギフエ(サギフエ科) ヨウジウオ、タツノオトシゴ
(ヨウジウオ科) ヒウチダイ(ヒウチダイ科) エビ
スダイ、アカマツカサ、イットウダイ(イットウダイ
科) マツカサウオ(マツカサウオ科) サケガシラ
(フリソデウオ科) リュウグウノツカイ(リュウグウ
ノツカイ科) マトウダイ、カガミダイ(マトウダイ
科) ギンイソイワシ(トウゴロウイワシ科) ボラ
(ボラ科) ヤマトカマス(カマス科) ツバメコノシ
ロ(ツバメコノシロ科) ハガツオ、ヒラソウダ、マル
ソウダ、ゴマサバ、カマスサワラ(サバ科) バシヨウ
カジキ(マカジキ科) カゴカマス(クロタチカマス
科) ユメタチモドキ(タチモドキ科) タチウオ(タ
チウオ科) エビスシイラ、シイラ(シイラ科) マル
アジ、ムロアジ、モロアジ、メアジ、カイワリ、イト
ヒキアジ、コバンアジ、ヒラマサ、ブリ、カンパチ、ブ
リモドキ、ツムブリ、イケカツオ(アジ科) ヒメヒイ
ラギ、ヒイラギ、オキヒイラギ(ヒイラギ科) スギ
(スギ科) タカベ(タカベ科) メダイ、イボダイ

(イボダイ科) ハナビラウオ、ボウズコンニヤク、エボシダイ(エボシダイ科) イシダイ、イシガキダイ(イシダイ科) ヒメジ、ヨメヒメジ、コバンヒメジ、ウミヒゴイ(ヒメジ科) イッテンアカタチ(アカタチ科) アカアマダイ、キアマダイ(アマダイ科) シボリ、マトイシモチ、クロイシモチ、フタスジイシモチ、コスジイシモチ、オオスジイシモチ、テツポウイシモチ、ネンブツダイ、クロホシイシモチ、リュウキュウイシモチ、スミクイウオ、ヒメスミクイウオ(テンジクダイ科) マツダイ(マツダイ科) キントキダイ(キントキダイ科) ユゴイ(ユゴイ科) ホタルジヤコ(ホタルジヤコ科) ムツ(ムツ科) アカムツ、キハツク、ワキヤハタ、オオメハタ、スズキバラハタ、アカハナ、イサゴハタ、ツチホゼリ、オオモンハタ、ホウセキハタ、シロブチハタ、ノミノクチ、キジハタ、アオハタモドキ、クエ、マハタ、ハクテンハタ、アカハタ、アラ、ヒメコダイ、カスミサクラダイ、クマソハナダイ(スズキ科) タナバタウオ(タナバタウオ科) キス(キス科) メジナ、クロメジナ(メジナ科) テンジクイサギ(イスズミ科) オオクチサギ(クロサギ科) チダイ、ヘダイ、クロダイ、マダイ(タイ科) フェ

フキダイ、ハマフエフキ(フエフキダイ科) バラフエダイ、フエダイ、オキフエダイ、クロホシフエダイ、ウメイロ(フエダイ科) ソコイトヨリ(イトヨリダイ科) キダイ、メイチダイ(メイチダイ科) ヒダイ、イサキ、コシヨウダイ、コロダイ、タマガシラ(イサキ科) シマイサキ、ヒメコトヒキ、コトヒキ(シマイサキ科) タカノハダイ(タカノハダイ科) クラカケギス、コウライトラギス、トラギス、アイトラギス(トラギス科) ワニギス(ワニギス科) ミシマオコゼ、メガネウオ、アオミシマ(ミシマオコゼ科) ネズツポ、ネズミゴチ(ネズツポ科) イダテンギンポ、クモギンポ、ナベカ、ニジギンポ(イソギンポ科) フサギンポ、ダイナンギンポ(ニジギンポ科) シオイタチウオ、リュウキュウイタチウオ、ヨロイイタチウオ(イタチウオ科) イソハゼ、ダテハゼ、サツキハゼ、ハナハゼ(カワアナゴ科) チチブ、シマハゼ、クモハゼ、クツワハゼ、アベハゼ、オニハゼ、リュウグウハゼ、ニシキハゼ、ウキゴリ、ベリンゴ、イチマツハゼ、アゴハゼ、ドロメ、コモチジャコ、ミミズハゼ、トビハゼ、シユンカンハゼ(クモハゼ科) クマノミ、ソラスズメダイ、セホシスズメダイ、イソスズメダイ、シマスズメ

ダイ、シチセンスズメダイ、オヤビツチャ、ロクセンスズメダイ（スズメダイ科） イラ、コブダイ、オトメベラ、オハグロベラ、ササノハベラ、ホンソメワケベラ、ニジベラ、カミナリベラ、ホンベラ、キュウセン、テンス（ベラ科） ブダイ、アオブダイの一種（ブダイ科）カゴカキダイ（カゴカキダイ科） ヒシダイ（ヒシダイ科） キンチャクダイ、トゲチョウチョウオ、ゲンロクダイ、チョウチョウオ、チョウハン、トノサマダイ、タキゲンロクダイ、ハタタテダイ（チョウチョウオ科） ツノダシ（ツノダシ科） ニセカンランハギ、ニザダイ（ニザダイ科） アイゴ（アイゴ科） ベニカワムキ（ベニカワムキ科） メガネハギ、ムラサメモンガラ、アミモンガラ、サメハダモンガラ（モンガラカワハギ科） ナガハギ、ツラナガハギ、カワハギ、ヨソギ、アミメハギ、ウマズラハギ、アオサハギ、ウスバハギ、ソウシハギ（カワハギ科） ハコフグ（ハコフグ科） キタマクラ、カナフグ、サバフグ、マフグ、コモンフグ、シマフグ、カラス、シロアミフグ、サザナミフグ、モヨウフグ（フグ科） ネズミフグ、ハリセンボン（ハリセンボン科） メバル、カサゴ、ユメカサゴ、サツマカサゴ、ミノカサゴ、エボシカサゴ、ハチ、オニオ

コゼ、ダルマオコゼ、アブオコゼ、カゴシマオコゼ（フサカサゴ科） ウバゴチ（ウバゴチ科） アカゴチ（アカゴチ科） アネサゴチ、マツバゴチ、コチ、ハリゴチ（コチ科） ホウボウ、ソコカナガシラ、ヒレホシカナガシラ（ホウボウ科） ホシセミホウボウ（セミホウボウ科） コバンザメ（コバンザメ科） ヒラメ、ヒラメガレイ、カワガレイ（ヒラメ科） シマウシノシタ（サウシノシタ科） アカシタビラメ（ウシノシタ科） サイウオ（サイウオ科） キュウシュウヒゲ、ヤリヒゲ（ソコダラ科） ウミテング（ウミテング科） キアンコウ、アンコウ（アンコウ科） ハナオコゼ、クロハナオコゼ、イザリウオ（イザリウオ科） フサアンコウ（フサアンコウ科） ワヌケフウリュウオ、アカグツ（アカグツ科）

第二節 植物相

一 陸上植物

(一) 概観

桜島は溶岩の島である。

遠く一万三千年前に誕生した新しい島であるが、以来今日まで幾度となく噴火を繰り返し、溶岩を流出してそ

のたびに島の地形を変えてきた。

桜島の植物は噴火のたびに多大な犠牲を強いられ、群落の形成と破壊を繰り返してきた。溶岩流出で群落が完全に破壊され裸地となった溶岩地帯にも、やがてコケ類が生え、ススキの群落やクロマツ林が見られるようになる。さらに時間がたつとタブノキやスダジイの常緑樹林が形成される。こうした植物群落の移り変わり（遷移）は、昭和溶岩（昭和二十一年）、大正溶岩（一九一四）、安永溶岩（一七七六）、文明溶岩（一四七六）に生育する植物を観察すると良くわかる。つまり桜島の各溶岩地帯は、植生の遷移が世代を越えて同時にみられる最良の地域であり、植物生態学上の人類の貴重な遺産として保護されなければならない。

また桜島の植物には、桜島大根、サクラジマイノデ、サクラジマハナヤスリ、サクラジマエビネなど桜島の名を冠した特産種も多く注目されている。特に桜島大根は火山灰土壌という恵まれた条件があったから生まれた名品であることは良く知られている。

以下、(一)植物の垂直分布、(二)溶岩流上の植物、(四)植物の水平分布の順に述べていきたい。

(二) 植物の垂直分布

1 海辺の植物

桜島の海岸線は、溶岩が海中に流れ込んでできたため、断崖の部分が多く、砂浜は島の北側に広がっている。海岸沿いに道路が走り、人家が密集しているの、海辺の植物は生育場所を限定され、いずれも局地的な小群落となっている。また黒潮の影響を受けやすいので南方系の植物が、海辺や桜島近辺の小島に多くみられる。

a ダンチク群落

ダンチクは暖かい地方の海岸や河岸に群生しており、桜島では「ダテツガラ」と呼ばれ、秋になってススキに似た大型の花穂をつけるイネ科の植物である。赤水の海岸や赤生原から西道に至る海岸までの岩上に多く見られるし、燃島や沖小島にはダンチクの大群落ができている。このダンチク群落は海岸にあつて、ツワブキ、テリハノイバラ、ススキ、チガヤ、ハマゴウ、



ダンチク

コマツヨイグサ、ヤブガラシ、ハマエンドウ、などと住みわけている。

b ケカモノハシ群落

「海岸の砂丘地では、主に飛砂に対する適応性の違いから、いくつかの植生帯が汀線に平行に並んでいる。赤水から袴腰にいたる大正溶岩の海岸の凹んだ部分は、砂の移動がやや安定していて小型の砂



ケカモノハシ

丘地ができており、ケカモノハシが小群落を作っている。付近には、メリケンカルカヤ、チガヤが多く、イタドリ、ノリウツギ、イヌビワなどが内陸に向かって順次みられる。

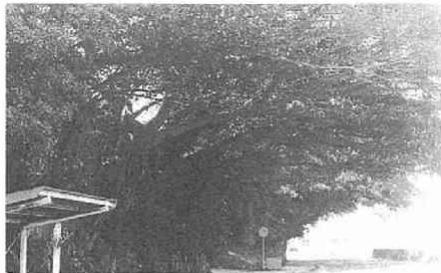
また赤水の海岸砂丘には小規模ながら、ハマゴウ、ケカモノハシ、テリハノイバラ、ススキ、ダンチクの植生帯が汀線に並んでおり、防波堤の凹地にはツルナ群落もみられる。

c アコウ群落

幹や枝からたくさんの気根を垂らしているアコウは、

代表的な亜熱帯植物の一つであり自生しているものや防風、日射よけに植栽されているものを含め、海岸の至る所に巨大なアコウがみられる。

桜島町藤野のアコウは道路ぞいに群落を作っており「藤野のアコウ群」として町民に親しみと緑陰の場を与えているし、桜島町の文化財にも指定されている。さらに、湯之



藤野のアコウ群

には胸高の幹回り七呎に達する巨大なアコウがある。

一方、白浜から古河良、高免に至る海岸や古里の海岸の断崖には、アコウ——タブノキを優占する樹林が形成されている。この群落は高木層に、アコウ、タブノキ、アラカシ、亜高木層には、ヤブツバキ、ネズミモチ、イヌビワ、トベラなどが、低木、草本層には、ツワブキ、ノシラン、ヤブマオ、オニヤブソテツなどが見られる。

2 平地の植物 (一〇〇〜三〇〇m)

ここでは集落のある海岸付近から耕作地及び照葉低木林(クズ——ムベ群落)の広がる標高三〇〇mまでを平

地の植物として述べてみたい。

桜島の地形を見ると北岳の北斜面には扇状地が広がり、東部や南部は各時代の溶岩流が海岸まで達している。この一帯は人家と農耕地であるが、河川の両側や社寺林にはシイ林やタブノキ林にヤブツバキの加わった常緑の広葉樹林が断片的に出現し、桜島の潜在自然植生の一部を知ることができる。古老の話によると、旧赤水あたりには大きなタブノキ林があったということであり、桜島の平地では人手を加えず放置しておく、いずれはシイ林やタブ林に覆われることであろうことを示唆している。

a 耕作地の雑草

耕作地の大部分を占める果樹園の雑草には、スギナ、ドクダミ、ムラサキカタバミ、ツユクサ、メヒシバ、イノコズチなど多年草で耐乾性の強い植物が多い。最近葉草として注目されているアマチャヅルも、ミカン畑の雑草の一つである。最近の豪灰のため除草や施肥をやめ、放置したミカン園やビワ園が、島内至る所にみられる。こうした捨て畑には、チガヤ、イタドリ、ホシダ、スギナ、ワラビなどが侵入し、チガヤ——イタドリ群落となっている。さらに放置して十年もたった果樹園には、

陽樹のセンダンが数段に達し、センダン——ススキ群落ができています。

畑の雑草には、メヒシバ、オヒシバ、イヌビユ、ツユクサ、スベリヒユ、コニシキノウ、ニワホコリなどが多くみられるが大きな群落をつくることは少なく雑草の種類も少ない。

一方果樹園や畑の周囲に

は、防風、防さくを兼ねたイヌマキが整然と並んでいる。イヌマキが植えられていない土手には、アオギリ、スギ、マサキ、アカメガシワ、ヤブツバキ、シロダモなどが多い。これらの木を包むように伸びている藤本類には、ビナンカズラ、エビヅル、ノブドウ、ヤマノイモ、カラスウリ、ヘクソカズラ、アケビ、ヤマフジ、クズ、ナツズタ、ニガガシユウ、ハスノハカズラ、ヤブガラシ、オオツツラフジなどがある。果樹園地帯に限らず藤本類の多いことは、桜島の植生の大きな特徴である。

畑や果樹園を結ぶ農道はすべて舗装されているので、



耕作をやめた果樹園

道路の中央にオオバコやネズミノオが並んでいる光景がみられない。農道わきの土手には、ススキ、イタドリ、ヒメヒオウギズイセン、ドクダミ、ヨモギ、イタチガヤ、カタバミなどの優占する群落が発達している。

b 集落の植物

家屋の周囲にはサカキやイヌマキが植えられ、防潮、防風の役目を果たしている。石垣やブロック塀には、オオイタビ、ナツズタが密着して生え、カラムシ、ツユクサ、チガヤ、イタチガヤ、ヒメクグなどは石垣の割れ目に小さな群落を作っている。やや湿った日陰には、オニヤブソテツ、マメヅタ、タマシダ、トラノオシダ、ヒメヒオウギズイセンを優占する群落も見られ、カニクサ、ツワブキ、ススキ、タチシノブ、イノモトソウ、ツルソバナなどをともなっている。

集落内の社寺林やあき地はタブやクスノキの森となっており、ビナンカズラ、アケビ、ノブドウ、エビヅル、テリハツルウメモドキなどの藤本がマント群落を形成している。

c ヤブツバキ(ヤマツバキ)林

桜島はツバキの里と呼びたい程にヤブツバキの多い所である。ヤブツバキは火山灰や火山ガスのみならず潮風

にも強い性質があるので、山野に自生しているだけでなく人里近くに移植され、保護され人々の生活に貢献してきている。スダジイ林やタブノキ林に必ず出現し、ヤブニツケイと共に亜高木層を形成している。桜島のヤブツバキの花弁の色は、黒神地区の黒紫色から、西道藤野にかけて、淡紅色へと徐々に白色に近づく変化を示している。

d クロマツ林

平地にあるクロマツ林の大部分は植林されたものであり、自生クロマツ林は溶岩地帯の一部に島状に点在するのみである。

植林したクロマツ林は、耕作地に適さない急斜面とか、やせた荒地に残されており、土地が肥沃化したクロマツ林は伐採され耕作地にされている。多くのクロマツ林は手入れが行き届きクロマツ純林の相観を呈しているが、古里や黒神のクロマツ林にはアラカシ、ナナメノキ、クスノキ、ヤブツバキなど常緑の高木が多く、広葉樹林と見誤るほどである。これは枝打ちや藪はらい等が行われず放置されたため、クロマツ林が自然に常緑樹林へと移り変わっていくことをしめしている。

一方自生のクロマツ林は、大正、昭和の溶岩上に見られる。桜島口に近い旧瀬戸部落の大正一期溶岩上のクロ

マツ自生林は、ネムノキ、ハゼノキ、ヤシヤブシ、タブノキ、クスノキなどが、クロマツとほぼ同じ樹高に達しており、クロマツを追い越す勢いである。このクロマツは胸高直径二八センチに達する。低木にはヒサカキ、ネズミモチ、ハクサンボク、ノリウツギなどが多く、草本類はコシダ、ウラジロ、ススキなどで種類は少ない。また赤水上部にある大正溶岩のクロマツ自生林には、高木のクロマツを中心にヤシヤブシ、シヤシヤンボ、ノリウツギ、ネズミモチなど陽樹が多くみられ、クロマツとヤシヤブシが閉じた樹冠となったクロマツ——ヤシヤブシ林を形成している。いずれも成長したクロマツ林の低木や幼木には、タブノキ、アラカシ、ネズミモチ等の照葉樹林の主な構成樹種が見られ、植物群落の遷移の進行を推察できる。

一方クロマツ林にも藤本が多く、ビナンカズラ、クズ、ナツズタ、オニドコロ、ヤマノイモ、アケビ、ムベ、サルトリイバラ、テイカカズラ、ヘクソカズラ、エビヅル、ツヅラフジ、オオツヅラフジなどがクロマツにからまっている。高免付近には特に多い。

e 照葉低木林(クズ——ムベ帯)

高免町園山を中心とした安永、文明溶岩地帯や黒神町

塩屋ケ元一帯は、見渡す限りクズに覆われ、ところどころタブノキやアラカシ、ヤブニツケイが高く抜きこんでた照葉低木林となっている。これは、ヒサカキ、ネズミモチ、ヤブツバキなどの低木の茎葉に、クズやムベをのせたまま成長しているもので、林内は植物トンネルのようになっている。土の表面は落葉の混



クズ

ざった火山灰がセメント状に固まり、下草や芽生えはほとんど見られない。この照葉低木林は、かつて薪炭用等に伐採されたものが萌芽し、成長してできたものである。そして成長と伐採を繰り返す間にクズが侵入したもので、伐採という人手のくわえられた標高三〇〇以上のりまで、このクズ——ムベ帯が広がっている。この植生は、高木層にアラカシ、タブノキ、ヤブニツケイ、低木層には、ヒサカキ、ネズミモチ、ヤブツバキ、シヤリンバイ、シロダモ、ナナメノキ、ハクサンボク、ヤツデ、イヌザンショウ、ノリウツギ、イヌビワ、草本層に

は、わずかにツワブキ、ベニシダ、ホラシノブ等がみられる。

地域の人々は、かつてクズデンプン（クズ粉）を採るためにクズの根を掘り取っていたが、現在採る人もなく繁茂するにまかせている。

3 山地の植物（二〇〇〇〜九〇〇メートル）

桜島の山地の植物は、照葉樹林帯、ヤシヤブシなどの低木林帯、ススキ草原、浮石地帯と標高に従った植物帯が肉眼でも区別できる。これらの植生帯は南岳と北岳付近で標高において若干差があり、南岳の植生帯は北岳よりおよそ二〇〇〜三〇〇メートル程低い位置に広がっている。

これは活発な南岳の噴火活動で噴出される火山灰や火山ガス、それに噴石による火災等が原因であろう。従って噴火活動の盛衰によって植生帯は上下に移動する。ここではおもに北岳斜面の植生を中心に、照葉樹林帯、ヤシヤブシ——アオキ群落、ススキ群落、浮石地帯と分けて述べてみたい。

a 照葉樹林帯（二〇〇〇〜六〇〇メートル）

北岳の照葉樹林は標高三〇〇〇〜六〇〇〇メートルの範囲に見られ、①スダジイ——タブノキ群落、②スダジイ——タブノキ——マテバシイ群落、③タブノキ群落とその優占種

によって、おおよそ三つのグループに分けられる。亜高木

層はシロダモ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、低木層はヒサカキ、アオキ、ネズミモチ、ハクサンボクなどが多く、しかもどのグループにも共通して出現している。最近の噴火による火山灰が二〇センチから数十センチも堆積しており、草本層は全く見られない所が多い。火山灰と落葉が混ざり固まっている状態である。

南岳の照葉樹林帯は標高一五〇〇〜三〇〇〇メートルに位置し、タブノキを中心とした北岳と同じような森林となっている。

b ヤシヤブシ——アオキ群落（六〇〇〇〜八〇〇〇メートル）

この群落は、タブノキやスダジイを中心とした照葉樹林帯の上部に発達しているものでヤシヤブシ、ノリウツギなど落葉性の低木が閉じた樹冠を作っている。これは噴火による山火事が頻発することから、本来発達すべき常緑樹に代わり、萌芽力の強い陽樹が群落を作っているものである。しかし最近の異常な噴火活動のため、優占



照葉樹林

種であるヤシヤブシの立ち枯れがひどく、ヤブツバキ、シロダモ、ネズミモチなど、ヤシヤブシ林の下層を占めていた常緑樹が生き残っており、しかもそれらは幹の上半部は枯れ、下半部にわずかに緑葉を残しているのみである。

またヒサカキ、イヌツゲ、アオキ、ノリウツギ、ムベなど一帯の植物も枯死寸前の状態である。ヤシヤブシやノリウツギなどの落葉樹は冬間に葉を落とすので、その間の火山の被害は少ないし枝だけでは燃え広がらないので、常緑樹より火災には強い。この付近一帯は、噴火活動がそれ程激しくなかった頃は、ヤシヤブシが閉じた樹冠を作り、アオキなど常緑の低木が広がっていた。現在このヤシヤブシ林は破壊され、山頂部に広がっていたススキやツワブキが下降侵入している。このような火山活動の影響がなければ、イスノキ——アカガシ林へ移行するはずの遷移が、逆方向のヤシヤブシ林へ、さらにはススキ群落へ進んでいって



ヤシヤブシ—アオキ林

り、植物生態学ではこれを退行遷移とよんでいる。かつて鍋山の麓一帯は桜島ツツジの群落がり、根回り一五メートル程の太木が多かったけれども、今は乱掘されてもう見る影もない。花は四月中、下旬に開花する。

c ススキ群落（八〇〇〜九〇〇メートル）

ススキ群落は山頂近くから、ヤシヤブシ——アオキ群落までの間に分布していて、火山活動の影響を直ちに受ける植生帯である。この一帯には、数十メートルも堆積した火山灰に埋もれてススキが芽生えているだけで、ほかには以前生育していたノリウツギやヤシヤブシと思われる低木の立ち枯れが一面に並んでいる。北岳付近では、標高九〇〇メートルあたりまで見られ、夏の間の噴石等で被弊したススキは、秋になって新芽を出し成長を始めている。

火山活動の激化、静穏化に伴い上下に移動する地帯であり、噴火活動がおさまるといわずにはアカガシ、モミ、ツガ、シキミなどの茂る常緑樹



ススキ群落

林となつても不思議ではない地域である。

4 浮石地帯（九〇〇峰山頂）

噴火による大量の噴石や火山灰が堆積し、急傾斜のため豪雨のたびに大小の崩壊が起こり、土石の流出が著しいので、完全な裸地となつているものと思われる。昭和九年の宇野氏の報告によれば、山頂部はイタドリ——ススキ群集で、「岩石の割れ目あるいは窪地にして立地の異動少ない細砂堆積地にはススキ、イタドリ、オオバコ、シヨウジョウスゲ、ヒナスゲ、ミツデウラボシ、イヌシダ等発生せり。而して風衝比較的少なく立地の移動も、稍々穏和なる場所にはヤシヤブシ、ツクシヤブウツギ、ナガバキイチゴ、ヤマヤナギ、ツクシゼリ、アキノキリンソウ、タチツボスミレ、コオトギリ等を優勢種とする植生である。」と記されており、五十年前の山頂には緑の息づいていたことがうかがえる。

(三) 溶岩流上の植物

1 昭和溶岩上の植物

昭和溶岩は昭和二十一年に溶岩が流出してから四十年たち、溶岩の表面は部分的に風化し始めている。

溶岩の日陰部分や多孔質の表面を持つ部分には、キゴ

ケ、ハナゴケなどの地衣類スナゴケ、ススキゴケ、ツボミゴケなどの苔類が侵入して溶岩にとりついていてゐる。これらの先駆植物が溶岩の表面に侵入定着すると、火山灰や火山砂がその上に堆積し、また植物自体の腐植化により、わずかながら土壤を形成する。この有機物を含んだ新しい土壤に、タマシダ、ススキ、イタ



昭和溶岩上の植物

ドリ、クロマツ、ヤシヤブシなどの高等植物が侵入してゐる。植物の種子も根も全くなかつた昭和溶岩地帯は、四十年たつた今溶岩の凹地にイタドリやススキの小群落が点在し、あちこちにはクロマツやヤシヤブシもみられる。大きいクロマツは高さ五メートルに達してゐるものもある。最近十年間の活発な噴火活動で噴出する火山灰や火山砂は相当な量に達し、溶岩の間隙はかなり埋め立てられてゐるので、植物の侵入は以前にも増して早い速度で進むものと思われる。昭和溶岩地帯においては、大量の火山灰は短期的に見れば植生に被害を与えることになるが、

長期的には土壤形成を早め、植生の発達に大きく貢献していることになる。

昭和溶岩上にはクロマツ、ヤシヤブシ、ススキ、イタドリ、タマシダの五種類の高等植物が見られる。

2 大正溶岩上の植物

大正三年噴出の大正溶岩は、赤水の上部標高五〇〇以付近から西へ流出した袴腰溶岩流と南岳の中腹から東南方向へ流出し、瀬戸海峡を埋めて大隅半島と陸続きになった瀬戸溶岩流がある。大正溶岩は、流出後七十年経過しているので岩体の風化も相当すすみ、岩体の上部表面には頭骨大から拳大、それに砂状に風化した岩屑が降下した噴出物と共に広く厚く堆積している。

大正溶岩の植生は、昭和溶岩よりはるかに連続した広がりをもっているし、植物の種類も数も大幅に増加している。大正溶岩は広大であり、桜島西部の袴腰溶岩流と東部の瀬戸溶岩流で、さらに瀬



大正溶岩上の植物

戸溶岩流のなかの第一期溶岩（一月流出）と第二期溶岩（三月流出）で、それぞれ植生密度に大きな差がある。

また各地域でも微地形による違いが認められる。

袴腰溶岩流の植生は、流出口に近い標高二〇〇以付近にはクロマツ、ヤシヤブシが閉じた樹冠を形成しているところやクロマツの天然林があり下流域にあたる国道沿いはクロマツ、ヤシヤブシ、シヤシヤンポ、ノリウツギ、ススキ、イタドリ、ムベ等が群落をつくっている。

大正溶岩には、クロキ、ヤマヤナギ、ハゼノキ、ホソバイヌビワ、アカメガシワ、ヌルデ、メドハギ、シヤリンバイ、アキグミ、ナワシログミ、ヤマザクラ、タブノキ、クスノキ、ヤブニッケイ、サタツツジ、ニセアカシア、ネムノキ、アコウ、マルバハギ、センダン、ヤブマオ、コフジウツギ、ススキ、コシダ、イタドリ、ホラシノブ、ミヅシダ、ミツデウラボシ、ツワブキ、タケニグサ、マツバラシ、ヒトツバ、クズ、ヘクソカズラ、ナツズタ、ムベ、アオツツラフジ、ニンドウ、テリハノイバラ、ハマゴウ、エビヅル、ノブドウなどの植物が見られる。

3 安永溶岩上の植物

安永溶岩は安永八年（一七七九）の噴火で流出し、南部の有村付近と北東部の高免、園山にかけ分布してい

る。溶岩流出から二百六年たつた安永溶岩は、大半は照葉低木林とクロマツ植林地であり、岩体の露出箇所は殆んど見られない。

植生は高木層に陰樹のアラカシ、タブノキと陽樹クロマツがみられる。ここには亜高木層は形成されておらず、低木層にシヤシヤンポ、ノリウツギ、ネズミモチ、ヒサカキ、クロキ、ハクサンボク、ヤブニツケイ、草本草にはツワブキ、ミツデウラボシ、ヤブラン、イタドリが多い。しかし標高三〇〇附近にはアラカシを欠いたクロマツ——タブノキ群落もみられ安永溶岩の植生も一様ではない。

このように安永溶岩の植生は陽樹と陰樹の混交林であるが、アラカシ、スダジイ、タブノキは幼木や低木も多いことから、やがて、次の遷移段階の陰樹林へ移行する準備ができているといえる。またこの安永溶岩地帯は先に述べた照葉低木林のクズ——ムベ群落に多くふくま



安永溶岩上の植物

れ、藤本類が多い。

4 文明溶岩上の植物

文明八年（二四七六）の文明の大噴火から五百九年たつた文明溶岩は、南東部の持木、野尻付近と北東部の浦之前、大燃崎一帯に流出したもので、耕地にされた地域が多い。

文明溶岩の植物は、持木や野尻地方はクロマツの植林地が大部分を占めているが、浦之前や大燃崎には一部照葉樹林が萌芽林の形で残されている。ここには高木層のアラカシ、タブノキを優占種とし、亜高木層にはシヤリンバイ、ネズミモチ、ナナメモチ、ヤマモモ、ヒサカキが多く、低木層にはハクサンボク、イヌビワが、草本層にはヤブランが多い。林床にはタブノキ、アラカシなど陰樹の実生も見られる。これは森林構成が複雑、多層化し、より安定した森林が形成されつつあることを示している。タブノキ、アラカシを中心とする文明溶岩の群落は亜極相であつて、この地域の極相（クライマックス）であるスダジイ、タブノキを優占種とする群落の前の段階である。

5 有史前溶岩と袴腰基盤層の植物

前記四つの溶岩流は流出年代がはっきりわかるので植

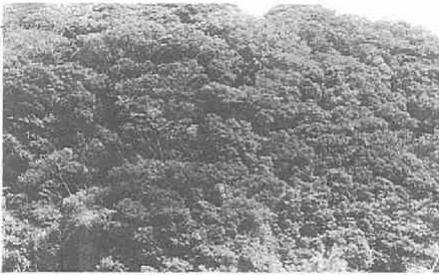
生の変遷が時間の経過との関連の中で理解できる。以下に述べる地域は年代こそはっきりしないけれども、明らかに文明溶岩よりも古い時代の溶岩なのでその植生の様子を述べたい。

a 北岳溶岩流

北岳溶岩流の植生は、(一)、3山地の植物の、照葉樹林帯で述べたように、スダジイ、タブノキを優占種とする常緑広葉樹林が発達している。また、ヤブツバキやアオキなどこのタイプの森林に必ず出現する種も見られ、桜島独特の植生というものではない。しかし実生や下草が極端に少なく、最近の豪灰が植生の発達のを足かせになっていることは否めない。

b 袴腰台地

袴腰台地は約一万八百年という古い時代に生成されたものと言われ、下部は砂岩、頁岩などの堆積岩からできており、上部はこれまでの火山活動による噴出降下物のシラスが堆積している。このため断



スダジイ・タブノキ林

崖の一部からは地下水が湧出するなど土壌水分が安定しており、植生も豊かである。台地の平坦地はかつて耕作されていたが、今は公園となっている。

台地の斜面はモウソウチクやメダケなどの竹林や常緑樹林が発達している。特に南部はスダジイを優占種とする照葉樹林である。高木層はスダジイ、タブノキ、亜高木層はネズミモチ、ヒサカキ、ヤブツバキ、ヤツデ、シャリンバイ、草本層はヤブラン、トウゴクシダ、タマシダ、ヒトツバ、ツルコウジなどが多い。この植生は人家近くにあつて当然人手の加えられたものであるが、スダジイを優占種とするより遷移の進んだ森林を形成している。

この袴腰台地には、モクタチバナなど南方系の植物やハマカズラのように珍しいものもある。

袴腰台地の東側の斜面は、マテバシイ、タブノキの萌芽林で、高木層にマテバシイ、タブノキ、アラカシ、ク



黒神のスダジイ林

スノキがあり、亜高木層は多くはヤブツバキであり、ほかにサンゴジュ、ハゼノキ、シロダモ、モクタチバナ等がみられる。低木層にはヒサカキ、ネズミモチ、クチナシ、クスドイゲ、タラノキ、イブセンリヨウ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ガクウツギ、マルバウツギ、イヌビワ、メダケ、ナワシログミ、草本層はノシラン、ツワブキ、ヤブランが多く、イシカグマ、サツマサンキライ、タマシダ、タイワンコモチシダ、イノデ、ツルソバ、フウトウカズラ、アマチャズル、ヤマフジ、ハスノハカズラ、オオツツラフジ、ハカマカズラ、テリハツルウメモドキ、リュウキユウヤブラン、テイカカズラ、クズ、ツルソバ、ムベ、センニンソウなどが見られる。

c 黒神・腹五社の社寺林

黒神中学校の裏にある腹五社の社寺林は、高木層、亜高木層、低木層のいずれもスタジイが優占する純林となっており、組成的には桜島で最も古い森である。こうした純林ができたのは大正噴火による大量の軽石や火山灰で被害をうけ、幹の下部が埋没したため林床植生も単純となりスタジイの純林となったものである。スタジイの他には点在するものは、高木層にタブノキ、ハゼノキ、アラカシ、アコウ、亜高木層にヤブツバキ、ヤブ

ニツケイ、低木層にヤツデ、ネズミモチ、ハクサンボク、シヤリンバイ、ヒサカキ、イヌビワ、ナワシログミなどである。林縁にはクロマツやススキが広がっている。このような有史前溶岩の生成時期の前後関係は明確にできないが、遷移の面から植生を見るとタブノキを優占種とする森林からスタジイの優占する森林に移り変わっているようである。

(四) 植物の水平分布

1 沖小島

燃崎の沖九〇〇^ノに位置する沖小島は、南北に長さ約六〇〇^ノ、東西に約三〇〇^ノの小島で、標高三八・七^ノである。

島の植生は昔は主にクロマツ林に覆われていたが、今クロマツは少なく、代わって巨大なタブとアコウ、モクダチバナ、ハマビワなど亜熱帯性の植物を中心とする森林ができあがっている。海岸の斜面には、ダンチク——クズ群落やススキ——メダケ群落が見られるし、ケカモノハシ、ハマゴウ、ツルナ、オニヤブソテツ、ハスノハカズラ、ハマヘクソカズラ、ハマナタマメ、アメリカヤマゴボウなどが多い。

常緑樹林のアカウ——タブノキ群落は、亜高木層にモクタチバナ、ハマビワ、ヤブニツケイ、ハマクサギ、アカメガシワ、エノキを伴い、低木層にはトベラ、アカメガシワ、カンコノキ、マサキ、シヤリンバイ、ヤマグワ、クサギ、オオムラサキシキブ、ヤブマオ、シマイズセンリョウなどがみられる。草本層には、ホソバカナワラビ、イソスゲ、イシカグマが多く、ムサシアブミ、ナングクウラシマソウ、ハマボツス、チヂミザサもみられる。この沖小島のアコウ——タブノキ群落は、桜島では最も発達した群落である。また藤本類では、ナワシログミやテイカカズラがタブノキやアコウなどからみついているし、ハカマカズラも珍しい植物で、袴腰台地や竜ヶ水に見られる。

また陽性植物に属する竹類はタブノキに駆逐され枯れかかっているがメダケ、マダケ、ホテイチク、ヤダケの小群とホウライチクが南部海岸沿いから丘陵部に群落をつくり繁茂している。

2 神瀬

桜島の西部にあり赤水から一・五^キの沖に浮かぶ砂礫丘である。風波の強い時は全島が潮に洗われる程の小島である。鹿児島島の自然（昭和三十九年）には、「植物は

全部で六種類でハマエンドウ、ハマヒルガオ、ハマニガナ、スカンポである」と記されているが、現在は一木一草もない。植物の侵入と後退が常に繰り返されている。

3 燃島（新島）

燃島は桜島の北東一・五^キに位置し、南北七五〇^ミ、東西四〇〇^ミ、標高四三^ミの小島である。

燃島の植物は集落地域と原野では、植物相が大変違っている。社寺林を含む部落内には数十本の巨大なアカウが幾条にも気根を垂らし、亜熱帯さながらのアカウ群落を作っている。このアカウ群落は低木層にヤツデとシヤリンバイ、草本層にオニヤブソテツ、トラノオシダ、ヒトツバ、タマシダ、ホシダ等を伴っている。アカウにはオオイタビやテイカカズラなど藤本類がからまり、マメズタ、ヒトツバが着生している。そのほか植栽されたものであろうかクワの太木が一本目につく。

集落を出て原野を眺めるとクロマツ、ダンチク、ススキからなる単純な群落である。大きなクロマツにはオオイタビがからまり、エビズル、ヘクソカズラ、ハマナタマメ、ムベなども多い。

ところどころに見える植物には次のようなものがある。タブノキ、センダン、エノキ、ハゼノキ、ナワシロ

グミ、アキグミ、トベラ、キョウチクトウ（植栽）、ソテツ（植栽）、イヌビワ、ハクサンボク、ネズミモチ、メドハギ、カラムシ、シロダモ、ヤマヤナギ、ニンドウ、アケビ、ヨモギ、イヌビユ、アカザ、シロザである。

海岸にはハマホラシノブ、タイワンコモチシダ、ハマエンドウ、ケカモノハシ、モエジマシダ、オオバノイノモトソウ、ダンチク、テリハノイバラ、トベラ、ハマナタマメ、ヤクシソウ、センニソウ、テリハツルウメモドキなどがみられる。

燃島の特記すべき植物にモエジマシダ（オシダ科）がある。名の示す通り最初に発見されたのを記念して名付けられたものである。

4 園山池のタケコケモドキ

園山池は安永三年（一七七四）に流出してきた安永溶岩が園山にぶつかり、左右に分かれたあと再び合流したとき、その麓の凹地にできたものである。両方から流れて来た溶岩は接続しているが、下部は海と連なり潮の干満によって池の水面も上下する塩水湖となっている。

園山池のタケコケモドキは、海草の一種の紅藻類でフジマツモ科に属し、北半球ではここだけしか知られてい

ない重要な藻類であるが、今は見られない。

干潮時の園山池にはチャボイが一面に広がり、イソヤマスゲ、アシチガヤが群落を作っている。かつてはハマサジやウラギクも多かったようであるが、今はウラギクがわずかに残っているのみである。池の周囲にはタブノキ、ヤブニツケイ、クロマツ、アコウの高木とトベラ、ネズミモチ、ハマヒサカキ、ヤツデ、ハクサンボク、シヤリンバイ、ハゼノキ、アキグミ、メダケの低木とツワブキ、ホラシノブ、ベニシダ、ススキなどの草本がみられる。つる植物にはムベ、ビナンカズラ、ツルソバ、ノブドウ、エビズル、トコロ、ニンドウが多い。

5 シダ植物

① 特殊羊歯および蘚類の自生地

鹿児島市東桜島町湯之にあり、昭和三十五年に「特殊羊歯および蘚類の自生地」として鹿児島県指定天然記念物となっている。この指定地域は湯之部落の上部通称「風穴」と呼ばれる海拔約二二〇メートルのところに一軒ぐらいの面積を占めている。一帯は溶岩のすきまから夏は冷風が、冬は温風が吹きでていて、しかも湿度が高いためシダや蘚類が生育しやすい環境となっている。ここには種子植物約二〇種、シダ植物約一二種、蘚類約一四種、

苔類約一二種が見られる。(文化財の知識)

この湯之に見られる特殊なシダや蘚類は、サクラジマイノデ、マキヒレシダ、ヘビゴケ、ヌマゴケ、コウヤコケシノブ、オカムラヒシヤクゴケなどがある。

サクラジマイノデ(オシダ科)は、桜島の湯之だけに産するもので、葉の長さが七〇センチばかりで、葉柄の鱗片は黒色をしている。マキヒレシダ(オオヤグルマシダ、オシダ科)は、昭和十年に発見されたもので、根茎を地上二〇センチも伸ばし、長さ一・五〜二センチぐらいの葉を輪状につける大型のシダ植物である。日本では桜島だけに見られる。ヘビゴケは熱帯性の蘚類であるが桜島は本種の北限地として知られている。ヌマゴケは北方または高山性の蘚類であり、九州では屋久島の高地で採集されている。またコウヤコケシノブやオカムラヒシヤクゴケも貴重な種である。

このようにわずか一帯ほどの狭い地域に熱帯性のものと寒冷地のもの両方が混生していることは、風穴という気温や湿度の特殊な生態条件がシダ類等の生存を可能にしていると考えられ、生態学上興味あることである。

しかしこうした貴重で珍しい植物も全国の愛好家の乱獲と生育地が谷間にあって数十センチも積もった降灰のため

ほぼ全滅したようである。筆者が調査したかぎり見当たらなかった。

② その他のシダ類

サクラジマハナヤスリは昭和十年に桜島の鍋山の火口付近で発見された七センチぐらいの小さいシダである。これは、栄養葉がなく、胞子葉だけをもった世界的に珍しいシダであるが、昭和二十年の大噴火の降灰で埋もれて絶滅したらしく、その後桜島では発見されていない。このほかに桜島で見られるシダには次のようなものがある。

マツバラシ、スギナ、イヌドクサ、ゼンマイ、カニクサ、コシダ、ウラジロ、イノモトソウ、ホラシノブ、アマクサシダ、タチシノブ、ワラビ、ハマホラシノブ、イヌシダ、イシカグマ、ホウライシダ、ユノミネシダ、タマシダ、タイワンコモチシダ、ナンカイタチシダ、トウゴクシダ、イノデ、ホシダ、ゲジゲジシダ、オニヤブソテツ、シケシダ、ヘラシダ、オオイタチシダ、ヨゴレイタチシダ、ホソバカナワラビ、ヒメワラビ、ヒトツバ、ミツデウラボシ、ノキシノブ、マメツタ、トラノオシダ。

参考文献

1 田川日出夫(一九七三年)：生態学講座 生態遷移 1 共

立出版

2 田川日出夫（一九八〇年）；桜島の植生及び土壤浸蝕と植

生の関係 桜島地域学術調査協議会調査研究報告

3 宮脇昭編（一九六七年）；原色現代科学大辞典3植物学研

4 鹿児島県理科教育協会（一九六四年）；鹿児島島の自然

5 鹿児島県教育委員会（一九八三年）；鹿児島県文化財の知

識

6 福山博之（一九七八年）；桜島火山の地質 地質学雑誌

7 山中二男（一九七九年）；日本の森林植生 築地書館

8 宇野宗雄（一九三四年）；桜島の植生について 日本林学会

誌

9 沼田真（一九八八年）；群落の遷移とその機構 朝倉書店

二 水生植物

本町の東北端から東、南を経て西の端にかけては、桜島北岳を通る町境線をもって鹿児島市の東桜島地区に接しているが、北側は鹿児島湾奥の海岸線となつている。海産植物を論ずるとき、鹿児島市地域と桜島町地域とを分けて論ずる必要もあるまい。

先に地質の項でも述べたように、桜島は火山とともに形成された島であり、時代に従つて流出した溶岩によつて海岸線が形成されている。一部の古い溶岩流域では流砂によつて砂浜が形成されてはいるがその砂質海岸の一部で顕花植物アマモの群落が少量見られる程度である。砂質の海岸線にしても多量の礫を含んでいるために、

底質は凸凹が多くアオサなどの海藻が着生する。大部分が急峻な溶岩の壁を形しているため、ホンダワラなどのいわゆる藻場を形成している地域が散見される。桜島の海域に見られる海藻類は次のとおりである。

緑藻植物

ランソウモドキ、ヒビミドロ、アナアオサ、ボタンアオサ、リボンアオサ、アミアオサ、ヒラアオノリ、ボウアオノリ、ウスバアオノリ、ヒトエグサ、ヤブレグサ、ミドリゲ、アオモグサ、アミモヨウ、タノモグサ、ウキオリソウ、チャシオグサ、オオシオグサ、ホソジユズモ、タルガタジュズモ、フテノリ、ハネモ、ヘライワズタ、ヒメイワズタ、センナリズタ、スリコギズタ、タカツキズタ、マユハキモ、ウチワサボテングサ、ミル、モツレミル、フクロミル、ハイミル、イトミル、コブシミル、タマミル、ツユノイト

褐藻植物

ナガシオミドロ、マタザキクログシラ、タマケヤリ、ハバノリ、カヤモノリ、イワヒゲ、カゴメノリ、フクロノリ、モツク、ネバリモ、フトモツク、シワノカワ、イシゲ、イロロ、アミチグサ、ハリアミチ、コモンアミチ、トゲアミチ、カヅノアミチ、サナダグサ、シマオオ

ギ、ヤブレオオギ、チガミグサ、ウミウチワ、コナミウチワ、シワヤハズ、ヘラヤハズ、ウラボシヤハズ、ワカメ、アントクメ、ヒジキ、マメダワラ、ヤツマタモク、アカモク、ノコギリモク、ヨレモク、ウミトラノオ、トゲモク

紅藻植物

ベニシドロ、タマツナギ、ウシケノリ、ホシノイト、ヒメリボン、ツクシアマノリ、オニアマノリ、マルバアマノリ、カモカシラノリ、タマイタダキ、カギケノリ、フサノリ、ヒラフサノリ、ニセフサノリ、ツクシガラガラ、パピラガラガラ、ガラガラ、ソデガラミ、ハイテングサ、イトテングサ、ヒラクサ、オニクサ、マクサ、ヒメテングサ、オバクサ、シマテングサ、ホソバナミノハナ、エツキイワノカワ、ヒメシコロ、ピリヒバ、カニノテ、ツツレグサ、フイリグサ、ムカデノリ、タンバノリ、キョウノヒモ、チャボキントキ、キントキ、マツノ

リ、コメノリ、ハナフノリ、フクロフノリ、マフノリ、ツカサアミ、トサカノリ、キクトサカ、ミリン、カギイバラノリ、イバラノリ、ユカリ、ホソユカリ、イソダンツウ、アツバノリ、オゴノリ、ミゾオゴノリ、オオオゴノリ、シラモ、カバノリ、シンカイカバノリ、カイメンソウ、モツレテングサモドキ、オキツノリ、ハリガネ、スギノリ、ツノマタ、ハナサクラ、フシツナギ、ワツナギソウ、ヘラワツナギソウ、ミルヒビタマ、ランゲリア、カザシグサ、ウブケノリ、ケイギス、エゴノリ、イギス、トゲイキス、アヤニシキ、アヤニシキの一種、アヤギヌ、ホソアヤギヌ、イトグサの一種、マクリ、イトクスグサ、ヤナギノリ、ササバヤナギノリ、トゲノリ、ツクシホオズキ、ミツデソゾ、ハネソゾ、パピラソゾ、クモノスヒメゴケ、ジヤバラノリ、コケモドキ、タニコケモドキ、タケコケモドキ

資料提供 鹿児島大学理学部教授 糸野洋氏

